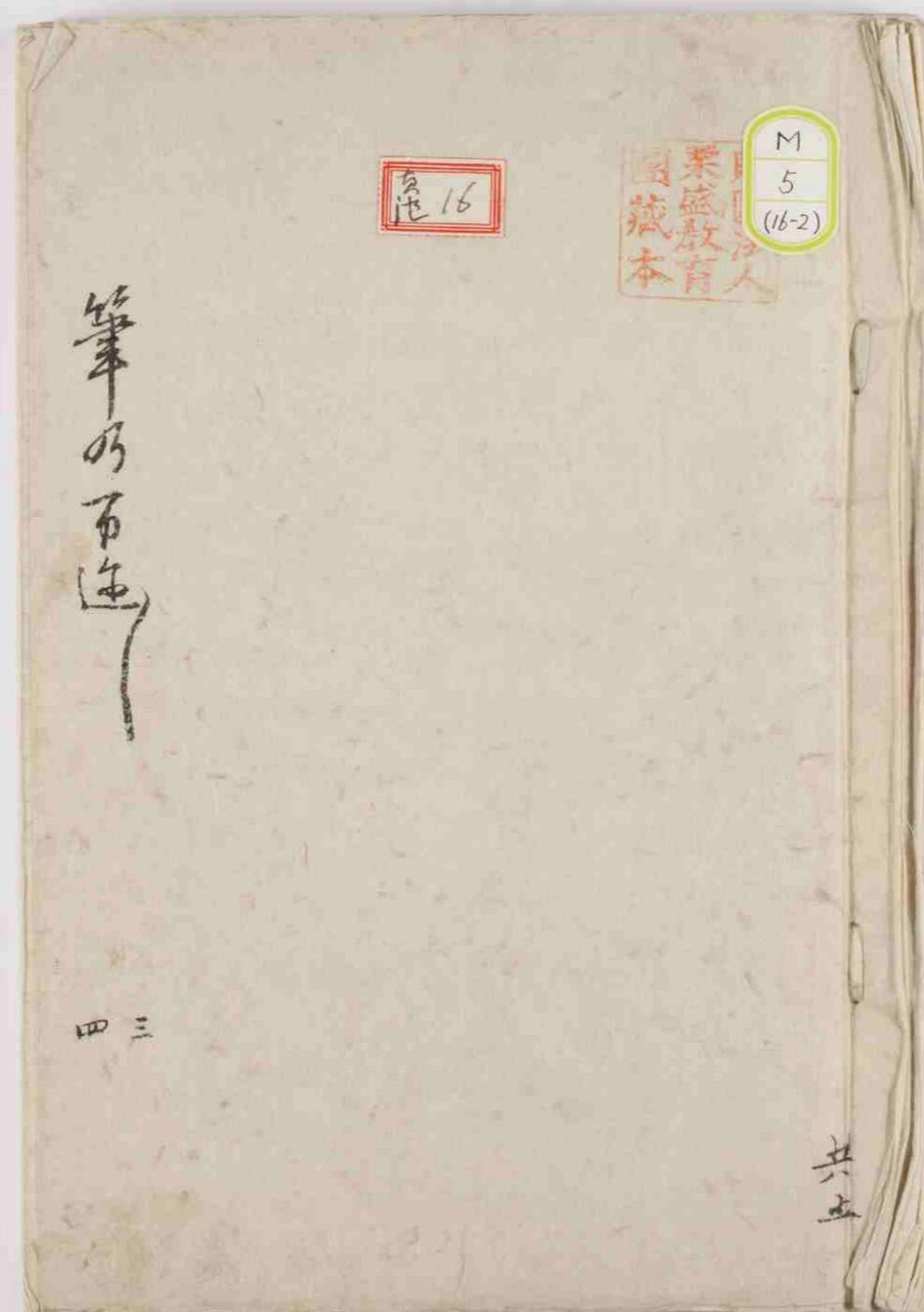
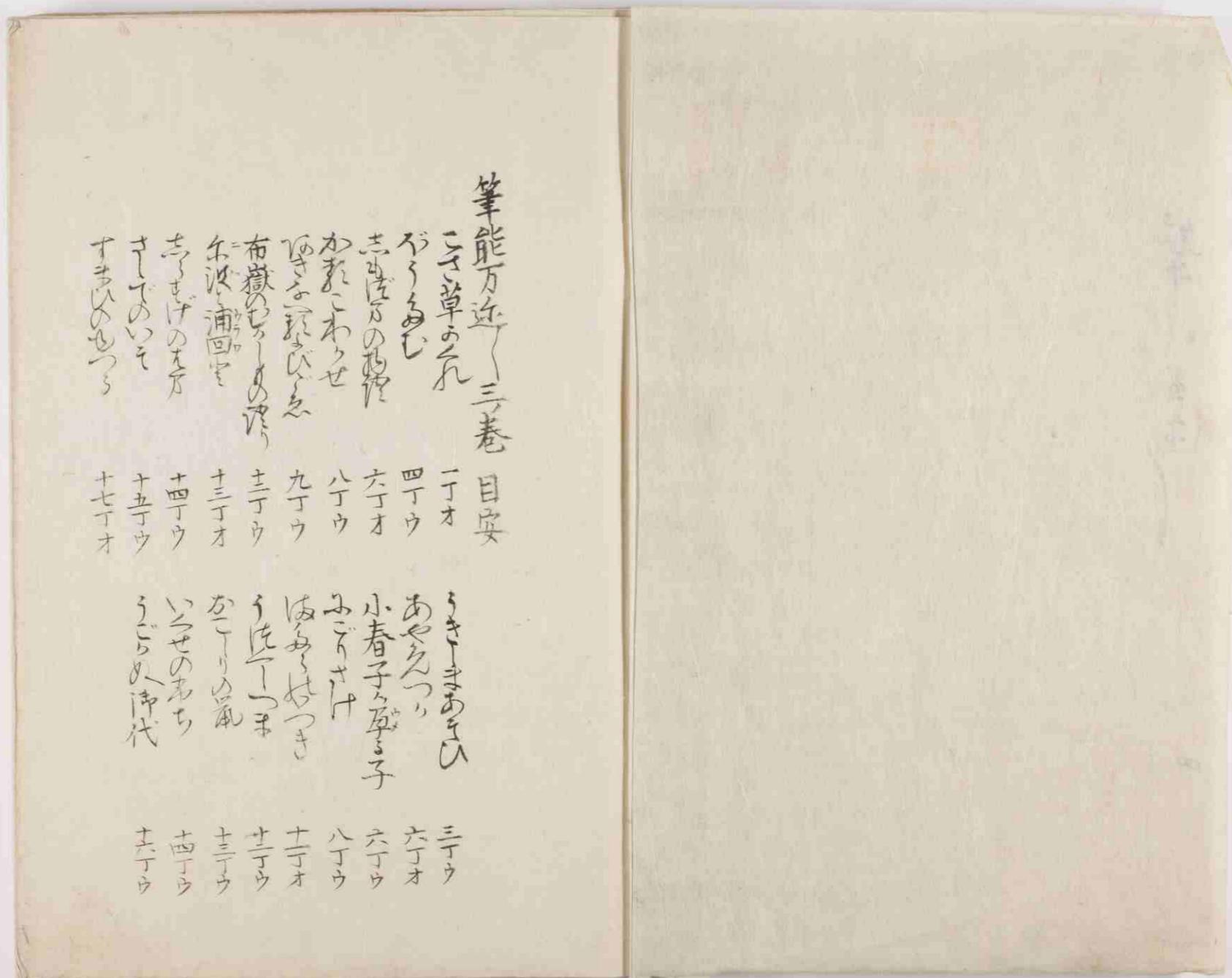


以下 汚れあり





布傳能万述麻耳三卷

管江真穆一著

爲家卿の詠歌すて夫木集秋部ニモ爲ハアリモ爲まぬ分ちる
えを山に見せや秋の月より歌ひうてアリテテトテトテトテトテト
山毛櫟南船東遊記胡砂坐て木螺の圖を世ノミモト言ひれ
申すドメナリテル連々今年北木螺出羽陸奥を人呼ミテ吹木真
角の五尺以上もの胡砂坐てヒビシテ、畜同放言ナレ書を近
ニテ大音の譜譯古事記と人編成ヒキナリテ書重の如キヤウス
ヒキナリテ中之湖沙胡砂をの事をナリテ傳えナリトモ王意
詩の意をナキナリモ已佐の事を證シテナリテ心上傳シ
事ナキナリテ此左

草庵と蝦夷エシもと戰アキラケのあやに仰アヒタシテりすを良傳ヨウデンのいさみ
吉野拾遺物語ヨウノシテイモノガシ不登ブドウ俱法師クボシと左馬介シマヂ猶子ヨウジをと來カミて佛ボクのまを奉
詣アヒタシテ侍スルて後アヒタシテハ樂アヒタシテをめぐらそはめてけるとすき時トキり琵琶ヘビヤを
弾アヒタシテし伊勢イセはと不堪カクれうてのをとをとをあひすとくかげぬをばと
侍スルきがふくとの樂アヒタシテとよかうとをえ侍スルとを胡國コグンと胡沙コサをば
草木アシカツもせぬとぞの比ヒあく侍スルまのあはえの月ヅキの夜ヨメをと侍スルね
友アシカツとおせじれをまよひて馬アヒタシテよりひひをめくづけ其裏アヒタシテ
風アヒタシテ吹アヒタシテきとくえまほのをとて草木アシカツをばと侍スルとをうくれを
よハチ光アヒタシテを心アヒタシテかねむとちやく傳アヒタシテ鶴長崩ツバメノツクルの道アヒタシテにはまけと絲アヒタシテ
幸アヒタシテはは道アヒタシテをゆく心アヒタシテけの心アヒタシテやとアヒタシテ世アヒタシテあるとくわざと
をもとさきをねどえとすとがれ記アヒタシテ夷州エシ風俗ブンソクの中に王餘ウエイ餘ウエイ蕭スル
在アヒタシテ浦アヒタシテ魚人ウオジンをシヤーフアヒタシテを消アヒタシテれ山玉エシ玉エシ餘ウエイ蕭スル
ヨシヤニモヒシ泳アヒタシテの王餘魚ウオジンを事アヒタシテ西浦エシ太田オオタ本浦エシ王山エシソリ辞アヒタシテ キシ宇須阿夫多

手の浦多の蝦夷エシ處女シロをわきアヒタシテ竹アヒタシテを五寸アヒタシテはりアヒタシテ切アヒタシテ細アヒタシテ箋アヒタシテとす
形アヒタシテは作アヒタシテて手アヒタシテ中の手アヒタシテのよ縁アヒタシテて縁アヒタシテをはなすはと會アヒタシテ音アヒタシテをかん
下アヒタシテ左手アヒタシテ其端アヒタシテを持アヒタシテて右手アヒタシテに舌縁アヒタシテを曳アヒタシテ口アヒタシテの内アヒタシテと鷦鷯アヒタシテの喧アヒタシテ鳴アヒタシテをに
唄アヒタシテうみひよアヒタシテかのいなまやアヒタシテを事アヒタシテを互アヒタシテと聞アヒタシテきを海アヒタシテのいとさうと
タつアヒタシテかアヒタシテ丁アヒタシテ女アヒタシテ二人アヒタシテ演アヒタシテ出アヒタシテて口アヒタシテを吹アヒタシテ鳴アヒタシテ其アヒタシテごとよりかアヒタシテこよりもあ
声アヒタシテを志アヒタシテと未アヒタシテ通アヒタシテ女アヒタシテをあすアヒタシテ群アヒタシテを集アヒタシテし奉アヒタシテ高アヒタシテ砂アヒタシテ子アヒタシテを踏アヒタシテがじら
吹アヒタシテくふと其アヒタシテ吹アヒタシテのよみうらと人汗アヒタシテと海アヒタシテの響アヒタシテ渡アヒタシテ風アヒタシテも波アヒタシテ寄アヒタシテ
琵琶アヒタシテ鐵アヒタシテを作アヒタシテわきアヒタシテむかし魯アヒタシテ西亞アヒタシテ人アヒタシテをもと詣アヒタシテ無アヒタシテ低アヒタシテ戾羅アヒタシテ耶架アヒタシテ軒アヒタシテ
副要アヒタシテ峰アヒタシテに人アヒタシテ松アヒタシテ前アヒタシテ風アヒタシテとをれ集アヒタシテて東アヒタシテ洋アヒタシテをとアヒタシテ船アヒタシテをとアヒタシテかかせつ
えアヒタシテを摹アヒタシテ作アヒタシテ造アヒタシテ漂泊アヒタシテの國アヒタシテを名アヒタシテめの故アヒタシテ置アヒタシテく付アヒタシテく鍛アヒタシテ笛アヒタシテ

中のことを北口琵琶も今と松前絶て津軽路に鉄工をへ候音階
ほらわをと金假獅子頭佛等の笛太鼓小合調で鉄笛を吹き踊
舞し鉄笛で蠻夷娘の吹くマクリも形もさすが風車造りと名を
胡笳をひくのを蠻夷人^ト胡吹てすのいとぞをば譯詞をあら
筆を聞きたれ胡砂吹て牛皮消^シ蔓の矢をも想て持未けむる
生馬草にあがめと牛皮消^シかず牛皮蔓をうる胡砂蔓^シ生馬蔓
中二種の其蔓の見て差別の、生馬蔓を拂^シ見せ乍振
知れどよをへりと圓^シ蠻夷人^ト牛皮消^シの其根丈理數等の解
縮^シをもは伊祁麻室^シ支那の横^シ截^シ毛根^シ多く直液^シ多毒
のう^シ蠻夷の薬用^シ事行^シ是を胡砂吹て餌を宋^シ宋^シ胡吹^シ噉^シ
碎^シ水面^シ吹^シ油^シもほひ^シくま^シふ^シえ^シま^シ風^シ吹^シ風^シ
風^シうち和平^シ吹^シ吹^シ風^シ避浪^シをま^シも^シこ^シと巨^シ吹^シ

からして火色^シ胡砂吹^シのとて除^シき季^シ都^シを^シけま^シ
あや為蒙卿のとくおみじとくの信濃^シ木曾路^シ橋^シは風^シ吹^シ
あてを^シえ給^シ生^シそ^シを^シゆ^シのとく蒙卿の^シ装^シ胡砂^シを^シ教^シひ
まく^シや^シ浦^シ全^シの^シ心^シ事^シを^シあ^シ世^シ死^シ胡砂^シを^シ生^シ論^シひ
辛^シ苦^シ笛^シ破^シや^シ樂^シや^シと^シ牛皮消^シ牛皮消^シの類^シ生^シ馬蔓^シ
生^シ馬^シ物^シの比^シり^シま^シ南^シ諸^シ島^シ漢^シま^シ田^シ名^シ計^シ鄉^シを^シよ^シは^シよ^シよ^シ年^シ物^シ
こ^シよ^シひ^シき^シを^シひ^シ今^シ家^シ恒^シ蔓^シの根^シ振^シ水^シ酒^シ糧^シて飯^シ
牧^シ漢^シ天明三至甲辰の大飢渴^シせ年^シさ^シか^シよ^シよ^シよ^シ年^シ物^シ
今^シを^シ北^シ胡^シ砂^シの根^シ振^シは^シよ^シ命^シ生^シあり^シの飢饉歲盛岡^シ奉^シ
縣令小本新右衛門尚方中^シす^シ甚^シ名^シ三輪權^シ永表秀翁^シ學^シ
え^シか^シ八^シ歌^シみ高^シ方^シ大^シ烟^シ來^シある^シか^シ世^シ下^シ方^シを^シこ^シを
足^シつ^シり^シ戰^シあ^シ海^シや^シ蠻夷^シの吹^シ鉄^シ笛^シを^シこ^シよ^シ草^シの聲^シ

えむすよまみれ又浮く人の附は胡破と登傳法師の話とは乞
乞の説ありあれ獨り蔓根たかひきねさるをもて

うきいほのま

奈良國秋田鳴沼大沼在
東遊記載ありと同國秋田郡寺内上程近キ鳴沼墨跡奇觀アリ
又舊檍原郡アリ考之檍原は琴平山本郡野田上
多郡秋郡野田アリ大沼アリ考之かねいははははははははははははは
三十中せぬもあらそよぐ海アリ波アリ風アリ吹アリれぬは是
六郡アリ小大沼アリ大沼アリ外アリ浮鳴アリが餘也アリ海アリ山
畠與山に峯幽アリ大沼アリ沼アリれ鳴松アリて浮鳴アリ大沼アリ
えれ松アリ葉アリ櫻アリ秋アリ紅葉アリ名アリ所アリ津アリアリ
地動アリわざや北アリ年アリこ岸アリ底アリ木アリ根アリわざアリと藻アリ

キニモ松並み沙河の入城すすめあひの年今六十せう余
物語寛延の浜アリ鳴多く寶賀京守て三四が下絲浮れく鳴アリ
をしに下りて秋田郡豊彦山麓アリ小池アリ中アリやの浮鳴アリアリ
すと同郡大阿仁アリ北北内界鎌倉川源字不詳上津野川今ハ廣角山主
三十四中アリの岸アリ源至村餘浦の松原アリ中守魚アリと沼アリ薩摩郡
をもくぬまひの沼アリ鳴アリをむ葦アリを間アリを間アリを間アリ
は最上郡アリ松沼アリをきぬあらそよぐ山アリ浮鳴アリの名あり
阿仁の七倉山の麓アリ金倉川の岸アリ小築天神アリをむく山アリ浮鳴アリ
またその名より近き道城アリ材ありと浮鳴アリ洪水アリ今アリあらわす
菅神社地アリ駿河國の浮鳴アリ原アリとみにて後と變地アリ原
作アリや安彦山の浮鳴アリの事アリ櫻狩アリ日記アリ載アリとふ記
ぬと鳴アリ多々置賜郡の大沼アリ如く浮鳴アリ世主山

がくたじ

牡丹をやうたむに桃冊子より其後まろやかな草花の
 夢庵の句牡丹はかづつりゆきまとせむほんすく育書
 二巻山牡丹の事を載て遠江國成多村の水上の大牡丹を煙霞
 綺説を引出せりまし銳木素行が神農本經解故卷云本邦牡丹無害
 惟遠江州山中真一未詳といひて見そり牡丹信濃國政務山
 奥りしらか多いよあれ戸隱山を參り秋道りを壇村へとまくが
 紅葉狩の謡曲をさきの道をゆくがまほと志垣村のちがき
 庫垣を立て北山路を走る後より来連の男の東屋
 紙漉村の北三四人余ふれにまよひて行戸隱山飯綱嶽を
 の山々に重く西南木曾の山を續て其谷下の花原山の如玉城を鑿
 薪の筏給り鬼を埋めし地鬼舞里の邊に紅葉山暮に入りし雪ふ

あれよ其谷々は真麻黄の北草あれは風生る雪と残雪の穴あ
 き自粧丹多り半キ越後國の画工梅典といふ詩けよとせ思無
 黒村の松巖寺にて禪林の柴守在りと庭に大蠍蔓やとまくがまほと
 うつぬづき戸隠厭並ぶ飯綱山の坤乃方に中止食中と寄出
 此山の山中をれて音共日攀登て衣冠を紅葉より鬼女の住む巖窟
 えの洞の今口三十間斗り廣奥深五十間餘るも土壙をまへ箇
 壈り谿の縁瀧をちくい淋き奥山の幽谷に白花大輪の牡丹盛
 そ各處も雪の手も残らず年すと蘋と菊のいと多く秋とくの花
 芽うやかや風うやかや吹かや吹送る香の杜麗までかくは
 わふふすと美濃國の醫師可白春誠といふ人信濃國を詔六
 斐池山まゝ政務山より牡丹皮を採せ薬つひ其氣はとせを詔
 によよひりすと最上を年毎に蒟蒻の粉をとて渡し商人の物語八月山

近き太谷牡丹多し五月の辰月山中より多く繁茂する
 牡丹折るを多き名誰哉ばかりあれどありて近事を今見
 べば牡丹大木立る雪にまれば枝色白花と白紅紫の二色も
 まことに咲すとぞもむかし自然生牡丹を酒に浴せし今其
 名と傳へて越後國沼尾郡上百合大臣の手舊に於て磨り更に
 ありし事牡丹十半程出羽國山本郡鹿渡の驛近辺に村内甚
 深山幽谷の地をよじり可兒氏の物語の源三位相政御得
 露みめで幸尾の一株篠^{一株篠}一節三寸本根^{本根}近に至猪早^{近に至猪早}之後
 半歲翦りやがて血脉を絶り其猪野氏の御家農耕^{御家農耕}出
 の無名と牡丹本が如花少く花多き紅紫自春^{自春}より
 あけり牡丹葉わゆるのまこと林に多山に生すとゆきとご
 わり本草書を余は西の山ある日出庄主藥師山牡丹あり

あやめづら

越後國三条郷より近く山を塚といひえりをすと山塚
 はよしと間六をこよみのつゆすと菖蒲前猪野早太^{前猪野早太}兩人^{兩人}都り
 観音^音を落^落生の栖居^{生の栖居}て老^老と入^入をうちほのまきとひ仕^仕
 早太^{早太}が塚も^もとしがさとく處今北中^{北中}の子^子女の^のあ^あ手^手鞠噴^噴
 向^向い山^山で光^光教^教をな^なめ^める^る金^金の^のむく^く今^今来^來と左千代^{千代}モ^モ
 カ^カキ^キト^トう^うみ^みと^とあ^あの^の前^前近^近隣^隣の^の人^人の^の娘^娘が^がまほ^{まほ}す^すく^く使^使ひ^ひ
 髪^髪結^結粧^粧粉^粉白^白粉^粉の^のナ^ナび^びと^と黃^黄金^金の^の笄^笄を^をせら^{せら}と^とよ^よす^すが^がり^りを^をり

下^下嬢^嬢り^りから

陸奥津軽里石郷の一向宗圓覺寺^{圓覺寺}古明行寺^{古明行寺}等^等有^有也^也剪^剪面
 明^明平^平安^安治^治下^下圓覺寺當其代^代蒙^蒙其^其四代^{四代}久^久不^不以^以常^常陸國
 築^築間^間存^存て^て親^親鸞^鸞聖^聖の^の第^第三^三室^室有^有淨^淨信^信房^房以^以て^て有^有れ^れ

末て南部の三戸に住し文明の頃は津軽の外濱の油川より處に存り
 念齋房をそなへるもひどく奥瀬善九郎某は兵乱をきこふ在り
 力を添り上祖と帝陸國の下妻を知行して下妻右近と源賴忠
 源信と頼政卿の末胤アキラ今本山東寺頼寺は家孝政家同下妻
 あるを承ります方より名告りあげられまではかくて苗性寺崎と改
 代々黒石より住ぬ吉と下妻頼忠後て寛政壬寅ばかり津軽の
 比良内の小湊の酒造屋久末氏の家よりもじて圓覺寺と号す
 上人のより頼政の末裔あり在りと頼政のよにて念佛德矣
 そのを書きて秋田久保田杉野氏家藏せり

小春女乞乳・兎

寄書列より、小春子を丁女より七八のちに伊勢三河に
 まわる心よりて誰はともかくも常此事心を絶えぞ

かひつむづけるゆゑにまことに人との通じて安否を知る
 安否をきむ勢の様さまあむむかすと明著淳のみ持けらば
 そひ日もちと五時かよはうの甲子を産ふく生りて解ひてま
 まくらまくはやうじとあさみひ思ひ稚子の手を度せじを此子
 あもひせり種らぬ其乳子を市女籠えわびと組み墨食
 養ふ井取籠モリカケルすすきを食ひて乳のをひく御のをひく此もめふ入で路捨が猿
 の食ひて去ひす鷲角聲を捕らじかひわつてまぐ市女籠
 を旅たる松の半枝掛く神に毛をもて夜更く里を出でて行
 はむとき後佐て行人のをす角からひひて紀の子をひき鬼
 捨ふ誰が子をか子をひき合ひて草で袖をひきまゆ乳のを取
 篠を引かず乳を名めて其子の眼アヅカせせ去れ田畠より乳のみ
 なり此子をめに養ふて乳をうづびの太工肥アシカりむらの寺の塚

松枝懸も市太龍をもとより御坐す。此子をめぐる僧徒
此子をほり見立てむ北乳子照重童の頭五行をもとてゆる名は
世名のひ今をもあらゆるのす。檢定寺の明陽院もあらゆる
養育で名徳一と付く七八年をゆき、ひそかにまづて聰敏童をれ
皇都にてまよがれ、壯年唯識のむをひき後、常陸國にゆ
築波寺を建立。小春女も老く尼と名に行ひ、うけたまつ林翠隱傳
云徳者唯識之翫楚也。闢常之築波寺而居開栗丸茂。シ
而疾、沙門莊後弊衣庵食恬如自怡。雖行長途不用藥與駕廻
牛騎瘦馬。嘗作新疏破山家大師相徒称す。見えり稱名徳
もて承教をまことにし。小春女も松子を掛め、冬をりそそをだ。
子懸山を以て子樹村いむす。此處は尊き不動明まぞ。此動の木
像御坐汗出く汗給事ゆる御坐汗を見ゆ世はるやく占マ

此尊形の御坐汗出む。其敷石と占問石と堂の内とその石と
あるひもう重石と床出汗いときハ此二ある占問石と露びてふ
ひねど其れ必御坐汗ある。あせの甚きとむ尊像のとて、をひ
天井をぬる。ひねどこじめんとほひてひそひて御身紙御垣
紙も御出汗紙も称へ。是をさうばかり守りあは、疫癘を避きます
瘞をさうひり金佛石像のあせ給す。世もひゆ。此子樹の不
動尊世もひゆ。古き事と穴そりまし出羽の山本郡仁村裏も小
懸村も是り子懸の由縁は云。徳の事もひや。秋田路さ
古徳僧の由来はあらゆる。死秋田小懸山小懸澤もあらゆる
鬼神の村ありし。鬼鹿モリ。狂馬と牝牧り産り。嘶の聲も
牡馬の嘶へ。名の字も響て馬をこれからとて名づけ。かく
いふ鬼鹿モリ産。其名馬の名をす。鬼神村。少し鬼神色り出る驚

を三う鬼鹿かづかより此村かづか舊いきの駒こまの軒橋くわんばしを參さんすと免めん神じん
かづかわくぞ

寄下津輕つがの南鄧なんとうをあく下せつ下習男げけいを輕子けい右背うへいはす
相續さがれ右背うへも京きょう發はり此こかねことかや子こやと傳名鈔伝めい列卒れつそく和わ加利文カリモン進しん

高たか來滿山まんざんちと見えり加利古カリコト事こと人ひととよひて

山さんごそごそづけ

出羽陸奥でわりくわにはトメにて北國ほくこくヒ濁なづ釀なりは釀な賣う村むら民家みんか
造つくり此こ醸酒なヒタタ方がた萬葉集まんげいしゆ二卷にせん小太宰こだざい帥大伴卿だいぱうけい譜ひ酒さけ
歌三首さんしゅ中なかに價無寶跡ひむぼせき言十方いとがた一杯いつぱい乃濁酒のなづけさけ尔る宣益せんえき目め八やあり
す松前まつまの鳴なる稻田いなだにあそばふそばふ米こめををわすわすて米こめののままれれ
合あれれ小酒こさけ釀なりを禁きん制せい外ほか安永あんえいの頃ときむむ湯殿澤ゆでんざわ之の建た造ぞう
濁なづ不應ふおう酣かな醉ゑ簡板かんばん酒さけ二字にじ一い字じを書かて濁なづももとと知しめめせ

主ぬしを年とし松前まつまの西磯にしきは浦うら入い此こ濁なづ酒さけを隠かして七里酒しちりさけにに蓑み笠かさを懸ける
浦巡うらまわ役人やくじんすとい形かたち酒さけれ七里酒しちりさけと記きと聞き人ひとをか甚ひ見みつ居ゐ此こ出羽でわの大山おおやまの鬼き殺ころ此こ水湖みずこ傳つたよよ小こ布ふ三椀さんわん不可ふか圖ず御ご
半はんくく一い盃ぱい飲く七里しちり醉ゑひひすす布ふ一い五ご二に合あ金きん動どうをを二に召めしめし給たま金きん六ろく飲く人ひと
食くがちがち進すすててまま咽のの二椀さんわん飲くててうけうけ大椀だいわん七里しちり飲く是これ濁酒なづけさけ不ふ可か然ぜんの大山おおやまの鬼き宿しゆくをを傳つたてて酔ゑ止とど給たま酒さけ主ぬし次つぎにに濁酒なづけさけををれれめめ停てい止し給たま浦うら人ひと手てをを解とせせををじじ浦うら役やく人ひと隱かてて七里酒しちりさけををすす役やく人ひと浦うら二に里り童わらわすすもも役やく人ひと飲く酒さけりり去こき二に童わらわ酒さけ錢せんむむけけききああくくりりふふせせめめししりりとと今いまの邊へををこことと松前まつま詞ことををすす南部なんぶ邊へをを重うりり辭ことりり古い代だい詞ことをを咲さく酒さけ醸なみみししハ酒さけとと肉にく縁えんののりりてていいりりかかわわよよ江え戸と砂さ子この品しな川がわののくくりり澤たく菴あん讀よ也や

人梅やを贈け。澤菴和尚モアヌ花のすがらもちうせく往
うちむむるえい。又濁酒は十里酒を銘をもと贈る。
十里半と三里半と心りやまめがまし世のふとさり酒を見
えたり於前よ七里酒あひ品川よ十里酒もある。また燭臺叢書
建仁寺大道表卷より酒。門前一モソシニ酒をうります。
かく戯南部の山家よハ栗碑にて造る濁醪ゆをきらじ
みハ甘露^{アマロ}ノ釀^{アキラメ}きるふこう酒もあり。まじ

あきらむてよびる。

番の久保田にて元三日尔賜鳥の初音^{ヒツヅナ}。鳶笛を付で。初梅
は櫻。室の早咲^{ハリタキ}をうそと和名まほまや。まほまや。花
花笛^{ハナチク}。所レ小夜菴^{コトハジカ}。初稿こそぞ折り賣^{ハサフ}。人心^{ヒトコト}。六
ひりをうき向^{むか}ひす。丁女^{ヂニナ}をのぞかせてをそひ。ひきよがすをうだ^{ハダ}。

のど^{ノド}焼^{ヤク}た米餅^{ミツシキ}。す、能代の奏^{ツイ}。す、じんぐすくす
名^{メイ}をばくれを寄^{シテ}。十字^{トモトモ}のまくらひ。キ目^{キモ}近^{アリ}。松板^{マツバ}賣^シ
えを馬^マ賣^シ。板^{ハタケ}買^ス。板^{ハタケ}買^ス。板^{ハタケ}買^ス。市中を大声^{ボーカル}。置^シ言^{ハシ}。お^{ハシ}
餅^{ヒツキ}。むろ酒^{ムロサケ}。んをか。舟商人^{ボウジン}。よひと^{ヨヒト}。うなめり。ま
腰^{ヒダ}出^ス籠^ス。青蔓^{シオガ}。編^{ハシル}。かの^{カノ}の^ノに。の^ノは。藤^{フジ}。天^{アマ}蕪^{アマ}。葉^ハ。籠^ス
背負^ス。猫^{ネコ}。喰^ス。猫^{ネコ}。面倒^{ミチマツ}。じや。じや。あひまくぬ。ま
秋^{アキ}。宿^ス。あひの本虫^{ホンムシ}。や。まくで。ひ。は。真^マ。倍蟲^{マツシムシ}。みの^{ミノ}の^ノ。ま
孫太郎虫^{スズカニ}。星川の孫太郎虫^{スズカニ}。よ。ばう。夜^ヨ。は。や。木^キの葉^ハ。包^ス。を
よく。男^{ヒト}。ゆき。と。深^シ。山^{サン}。木^キの葉^ハ。裏^{アヒ}。付^ス。虫^{ムシ}。が。葉^ハ。と。よ。藤^{フジ}
言^{ハシ}。まく。夜^ヨ。よ。北^ヒ。本螺水^{ヒムシスイ}。浸^シ。て。眼^{メガネ}。あ。ま。八^{ハチ}。目の^{メガネ}。清^シ。多^タ
少^シ。を。眼^{メガネ}。浴^ス。自^リ。ま。ま。多く。冷水^{コールド}。肉^ミ。ま。ま。日^ヒ。液^リ。出^ス。ま。ま。本^ヒ。螺^ヒ。水^ス。木^キ。包^ス。箱^{ボックス}。入^ス。が。北^ヒ。見^ス。博^ス

死ぬのひゑるまで見の名アリ。すこ木目才、蟻キヤヒキヤハ、死あり。此螺の形蓮葉蓮の葉、
貝カキや、似たり。而し螺に蓮葉の裏裏はあらう。其の裏の裏裏が
木貝カガメ、鈎栗カキツルの裏裏多々附付。陰山の古木古木に、シロウタノミ、津輕つがの松前マツフサ
冬の頃冬に、女房めらこにて絲曳シスハラフ納ハラフ。やまとて其者糸筋シスヒのといい如例。
賣マツルあり。是を耳アリ。由ヨリは、唐カタニの青森町セイモントを炭俵カゼイ一ツ
貰マツル。是を口試ムツシテ炭室カズニ。翁枝カジつキ。夜ヨク灰ホコや、まみ色子カミコロを
能マツルて、熾火チホ、燃マツルて、熾チホて、熾チホて。笑顔エイケイ作アシタスて、戯アソブて、あくべ。
主シメを、事モノをモノ。もじ太田英夫オオタヒロフ、常陸國ヒタチノクニ、水戸ミト在リ。萩生總督ハギノシ所
の所止宿シテ。壁中カツチヨウを山猫ヤマネコ、賣マツル。くわらり、ふくらわせ。
向むかむ。但ただし、翁枝カジは、打ハシて、あれ、海參カニの事モノ。海參カニを、おほ氣オホヒく、
南みなみを、まらぐ。山猫ヤマネコ、使ハサフけじ。正マサニれ、す。あり。是を、物モノ。北きた河カワ
の松魚マツナガ、鮭魚サケ。毛マツ。此魚シカニ、献上アシタス。前マサニ、隠ヒカク賣マツル。は、難ハラフ。

あれりと兵ヒサシ客ゲスト人ヒト、對アリ句カタすを、笑ハハひ、あひあれり。而アリて、秋田
より、久保田クボタ肆ヂ、ほぬるホヌル。よすあめヨスアメ。どくはぬるハヌル。省シテ辞ハシメテ、
えち漢エチカン、東ヒタチ鯛カジと、ふるさと、やびのヤビノ。こ、存リて、あらひアラヒて、あり。事モノ。其
奥カミ商マツル人ヒトの後アリ。ほそい。少シ。是を、又アリ。公魚コイ。大明タケミ、統志ツシ。存リ。也シ。魚ウオ。北ヒタチ方言ヒタチノカタニ。
知シテか。小魚コイ。松前マツフサ方言マツフサノカタニ。證シテ。胸ヒザ。脇ヒザ。腹ヒザ。食ヒサフ。是を、知シテ。証シテ。舌ヒザ。口ヒザ。鯛カジ。
魚ウオの事モノ。ひづ。よじ。よじ。よじ。よじ。よじ。よじ。久保田クボタ、真愛マサエ。魚ウオ。八龍ハチリョウ。
湖カワ。捕ハシ。及シテ。河カワ。波ハラフ。世セ。魚ウオ。人須ヒノヒ。急ハラフ。吉野ヨシノ國クニ。極ハラフ。難ハラフ。
事モノ。處ハシメテ。去ハシメテ。筆ヒツの力カリ。予ヨリ記メモ。

間當の齋観

出羽の秋田郡中北内庄ヒタチノシタ、上津野ヒタチノタケの米代川コモダガワの南ミナミに在リ。而アリて、
當ヒタチ北ヒタチ村マチ名ナミ古松尾コブシ。あり。而アリて、俚人マジヒトの口語ヒトゴトを、言ハシひ。筆ヒツの墨モクに、
間當磨ヒタチモリ當ヒタチを、書ハシメテ。而アリて、同名ヒメイ。大村マツシタ。す。此地ヒタチに、ちやくき

中道松尾留兵衛より人出と曰中比古の太田新田三軒家より始て
 此三家天和貞享のうどひ近藤基之丞葉林九郎兵衛
松尾當兵衛の子ひて答戸分太田新田分半也
 技郷又田澤同名大澤同名李代同名小摩當兵衛
 八幡宮より此を中へ移り廣く「中」の號と爲り大根もよしも生
 親親親親親親親親親親親親親親親親親親親
 神木あり此樹の本ハ周回四丈六尺五寸也此槐もかく稱
 すとぞ北村より翁也此翁若きに記傳傳傳傳傳傳
 飲食あれをぞの師法師をぞとやうけび秋より齒に口
 ちり翁り家老法師をぞとて集け翁法師をぞ傳傳傳傳傳傳
 翁坐しをぞとて奥山洞の奥深く取れ芭蕉は養
 一家より翁黑公筆訪ひ第ね火か老法師あつて能くそ因が引
 けちて攀折りうひきりそとす鍋と濁醪たあつてのとよひ
 草の筋をゆだ今汝をとよとよまやせ此法師あめをなせ

ものやうの陰りをそひ連休甲傷のこころもあらひしもとを
 おもきす見れば手取じんぱりあやげるよしと短き力がほれ難
 す是を料理事の毛やぢことやう尻張ぬふ外逃はせざれ山岩
 足く村未て手思ひ余きともわ妻の禮き翁をひき出を者
 时をうてあをれむなむるをまればあむじめがひさづて出を者
 をあそすりて舌みをと食ひて喰ひて酒ひてゆくよて飲て食
 壱夜よろて磨當よ歎ひ其者山玉毛里まれりとくも肉せす
 従のうぞ者け翁は不老藥を喰ひよぢゆくの爲め其妻より
 幸斗少て六七歳を経め正徳享保のころがん松前渡り人所
 松尾村の神の親殖し親人志士として卒あすた老人の傳言未だ翁
 まし松前の奥に住りゆかず不老の歯と自らあれ海山は大君す
 その地今翁翁がよしと槐の下をりておれ七處鳥羽院の養永の

人命も今文政やうよりもや七百餘歳まで、より清悅海上話アマシタガタひ

布獄りそくいそくいそく

陸奥國遠田郡涌谷郷アモリ近にわたり、布獄ソクをよみ。此山田村將軍の大武麻呂を征伐給し、とて布獄ソクを高札タカサカを給し、其の賊徒ゼイツを逃集め、は財寶チバウあり。多賀城まで運送の駆貨スルカを記す。奇年中制札死れ朽ハシケる。と書改ハシケル。又今もさうりよといふ。をす。今くふの式を貴ぶからける。

アモリいそく

童の戯れ遊アモリ事アモリ。まよ童アモリを人の連れ来て此童アモリ、交アモリをよみ。夫婦アモリをよみ。ソレはもれのよみ。ちうす。農民アモリを宿アモリを飯アモリ。料アモリを取アモリ。かくこらす。も北極アモリ。す。あを三河尾張アモリ。難社アモリす。上置アモリいじはスモ。けす。をかがれアモリす。糧アモリのこらす。

ソラカタあらじあらじ。併れ本の意とかがが。万葉集に。ちや
まよひ。ほきよきて。みび承アモリ。わ承アモリ。承アモリ。かくよめる。
歌の。あふそく。なよ。を。ひ。え。ま。よ。ま。よ。か。よ。云。日本紀。交アモリ。を。よ。め。の。そ。そ。前アモリ。す。け。ご。そ。方言アモリ。か。ゆ。か。ゆ。で。よ。そ。
万葉集アモリ。愛妻跡アモリ。不詔別アモリ。未者アモリ。か。よ。か。く。そ。ハ。そ。か。ゆ。ま。す。

アモリ波アモリ浦アモリ回アモリ。

鴉アモリの湖アモリを渡アモリ。舟アモリ等アモリ水アモリす。う。れ。が。す。き。浮アモリ。は。言アモリ。途アモリ。浪アモリ。日アモリ和アモリ字アモリ。を。あ。て。日アモリ和アモリの。事アモリ。わ。は。う。と。孤方葉集アモリ十卷アモリ。む。は。浦アモリ。东アモリ波アモリ。や。し。そ。ら。を。ま。ゆ。の。ほ。り。あ。の。な。か。し。せ。わ。あ。き。あ。せ。ふ。や。浮アモリ。日アモリ和アモリ。す。を。お。ざ。わ。ね。づ。を。お。日アモリ。櫻アモリ。日アモリ和アモリ能アモリ。で。海アモリ。佐アモリ。自アモリ。海アモリ。譯アモリ。日アモリ和アモリ。ひ。北國アモリの。海アモリ。の。方アモリ。洋アモリ。ひ。と。渡アモリ。が。う。を。海アモリ。ま。く。よ。鏡アモリ。を。

いよしよじよもあや 詞鰐を突捕より波れに油とろすをちだ
其波れちよじよわよヒヤシヒヤシトスのゆ津らはまく方葉より月余美
のひりやきよみ夕照よりはるるヨドリ浦固むらかく水を
金世浦聞よひきよせや船の舟を海を岸を漂ひほひにまく

游巨斯理の鼠

澳志梨と松前の西江指浦の南洋ナガマツ在於大嶋オシマ主里ミツリ島シマと嶋シマと樂ヨク遊古コトレ唐言カタカタモキモキ遊ヨウを詠ヨウ立タチ也北與興カタマリ鼠ヌシのいと多蛇ヘビ也多鷲サシ也
いと多鷲サシ也白鼠シロヌシをひしも捕尽ハシメテぬねまく海シマの多くる事シテに
鷺サシ鳴ノリ食エサ波ハラを鮑イシカ鳴イシカ七八ハチ人ヒトもあればあす群クラれ朱スル鳴スル波ハラ
鮑イシカ鳴スル鮑イシカ鳴スル鮑イシカ鳴スル鮑イシカ鳴スル鮑イシカ鳴スル天明寛政テンメイカンポの爲ヲを立タチ也
螺カキ海シマと風カキ大カキと群クラ小カキ童カキをひふ風カキ螺カキ多カキ也小カキ唐風カタマリ主裏ミツリ島シマと喜
翁カキは浮カキをひひ波ハラ也通夜トウヤを

かすりし冬の初めからひよしをよしよしよしよしよしよしよし
季ハセはえ失魚シテをひだこらの舟ボウを出ハシメる島部シマブの浦ブ松前マツマツと納メ引ヒ之
三子第ミチ守ムツけり鮎イシカをひだこ某カタマリ夏方カタマリをひ演ハシメる上アマさ山サンを嵐ハリ流ハリ木キ山サンを本ハシメ
恐ハシメらふ逃ハシメげハシメせハシメて來ハシメきり海シマ角カタマリをひ小カキの巻カキがひはあらハシメる云
鼠ヌシ舞ハシメ入ハシメる海シマ參ハシメ佐ハシメてはまハシメり倒ハシメり嵐ハリ海シマ也ハシメましよよしよ
よしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ
亭主者カタマリ聞集魚虫禽獸カタマリの件ハシメ安貞アシマツの後風川院カタマリの墳
伊與國矢野保カタマリうち重鳴カタマリ云ハシメ重カタマリ人ヒト重カタマリは重カタマリ也カタマリふ
久カタマリがおの太カタマリひあらカタマリ人ヒトひ魚カタマリひひカタマリかひカタマリきカタマリは魚カタマリ
重カタマリひひカタマリ見カタマリはの魚カタマリのやひカタマリは水カタマリ夥カタマリくひカタマリは其カタマリ酒カタマリ
を詔カタマリ引カタマリけカタマリよや中カタマリをひこほカタマリは魚カタマリを引カタマリけカタマリと傳カタマリけカタマリの岸
引カタマリよよまきカタマリ逃カタマリせカタマリ大カタマリあカタマリおカタマリけカタマリけカタマリすカタマリのよよ
お魚カタマリ八カタマリ魚カタマリもカタマリよよおカタマリいカタマリしよよカタマリ當時カタマリまで

えつり作れども小もあめはるをとて、嵐の船もさむて、舟
少しおかえりそぞり、嵐の船ありて又漁鳴の鼠も烟もあれば
此處は太路の多れ、北路根を握てみよ。舟の根をもじらひみをくら
小鮎す。大鮎す。鰐す。魚す。下伊豫國の里をゆきぬめかど。

白音の瀬

むすの名をひくかねみぬまゝ多く東濃道にて、二度參
遠江國の瀬名の瀬の橋ありて、津波うち類少く切出里等
三河國白音瀬。今に白須賀より宿をやひてをさもがく事、
うすし近々す。今より富澤^{豊前より流かり}今橋^{豊前より}長明^{が河道記より}重^{まこと}藤
川の宿も臂河岡崎^{治官生郷}と申す。

いそみあらわ

信濃國伊原郡浪合村の山^{ヨシノマツ}良翁權現堂^{イツ}齋^{セイ}寺^{トキ}此社^{モミジ}ノ

御陵^{ヨウリ}娶^{マツ}器^{カタ}至^{カタ}不^{ハシ}可^{ハシ}て瘧^{ヨモギ}て手^{ハシ}急^{ハシ}せ給^{ハシ}てよ候^{ハシ}
女^{ハシ}集^{ハシ}ひ^{ハシ}え^{ハシ}は^{ハシ}其^{ハシ}が^{ハシ}お^{ハシ}び^{ハシ}給^{ハシ}わ^{ハシ}れ^{ハシ}な^{ハシ}く^{ハシ}法^{ハシ}神^{ハシ}を^{ハシ}
葬^{ハシ}女^{ハシ}む^{ハシ}承^{ハシ}わ^{ハシ}り^{ハシ}之^{ハシ}を^{ハシ}下^{ハシ}其^{ハシ}も^{ハシ}參^{ハシ}浪^{ハシ}合^{ハシ}村^{ハシ}也^{ハシ}
坐^{ハシ}て^{ハシ}て^{ハシ}農^{ハシ}宿^{ハシ}の^{ハシ}ま^{ハシ}思^{ハシ}て^{ハシ}心^{ハシ}安^{ハシ}の^{ハシ}洞^{ハシ}と^{ハシ}め^{ハシ}事^{ハシ}す^{ハシ}の^{ハシ}浪^{ハシ}合^{ハシ}
あ^{ハシ}じ^{ハシ}坐^{ハシ}て^{ハシ}其^{ハシ}が^{ハシ}葬^{ハシ}聞^{ハシ}せ^{ハシ}人^{ハシ}泣^{ハシ}る^{ハシ}今^{ハシ}取^{ハシ}り^{ハシ}今^{ハシ}泣^{ハシ}て^{ハシ}仰^{ハシ}仰^{ハシ}
坐^{ハシ}て^{ハシ}其^{ハシ}が^{ハシ}残^{ハシ}供^{ハシ}を^{ハシ}乞^{ハシ}奉^{ハシ}て^{ハシ}浪^{ハシ}寺^{ハシ}と^{ハシ}あ^{ハシ}わ^{ハシ}る^{ハシ}其^{ハシ}が^{ハシ}残^{ハシ}供^{ハシ}
其^{ハシ}が^{ハシ}男^{ハシ}に^{ハシ}ま^{ハシ}浪^{ハシ}寺^{ハシ}と^{ハシ}あ^{ハシ}わ^{ハシ}る^{ハシ}其^{ハシ}が^{ハシ}残^{ハシ}供^{ハシ}
近^{ハシ}き^{ハシ}あ^{ハシ}ま^{ハシ}ま^{ハシ}ま^{ハシ}ま^{ハシ}ま^{ハシ}ま^{ハシ}は^{ハシ}餘^{ハシ}女^{ハシ}瘧^{ハシ}也^{ハシ}
苦^{ハシ}も^{ハシ}と^{ハシ}諂^{ハシ}海^{ハシ}武^{ハシ}威^{ハシ}國^{ハシ}一^{ハシ}卷^{ハシ}友^{ハシ}某^{ハシ}遠^{ハシ}州^{ハシ}在^{ハシ}留^{ハシ}て^{ハシ}其^{ハシ}處^{ハシ}の^{ハシ}
御^{ハシ}所^{ハシ}の^{ハシ}事^{ハシ}を^{ハシ}記^{ハシ}書^{ハシ}秋^{ハシ}葉^{ハシ}山^{ハシ}を^{ハシ}南^{ハシ}か^{ハシ}て^{ハシ}の^{ハシ}山^{ハシ}七八^{ハシ}村^{ハシ}を^{ハシ}飯^{ハシ}野^{ハシ}
山^{ハシ}唱^{ハシ}北^{ハシ}東^{ハシ}裏^{ハシ}山^{ハシ}申^{ハシ}六^{ハシ}村^{ハシ}を^{ハシ}水^{ハシ}久^{ハシ}保^{ハシ}入^{ハシ}と^{ハシ}往^{ハシ}昔^{ハシ}修^{ハシ}醸^{ハシ}酛^{ハシ}
都^{ハシ}を^{ハシ}元^{ハシ}佐^{ハシ}所^{ハシ}す^{ハシ}なり^{ハシ}匂^{ハシ}方^{ハシ}の^{ハシ}飯^{ハシ}野^{ハシ}奥^{ハシ}山^{ハシ}法^{ハシ}光^{ハシ}寺^{ハシ}へ^{ハシ}お^{ハシ}ま^{ハシ}せ^{ハシ}給^{ハシ}

行良ヨ良_{親王}食夢之親毛モリモロ君達御所ノニの行方ノハタツを慕ミムせまひ奥山オシマより
余ヨ寺モミジ一飯野奥山オシマ北奥カムシマ取遠ヒテムシび奥山オシマ信濃路シノロ也名信農
路シノロ趣モジム信州並高モタカツシマ山ヤマにはり豊ヨコシマ大原折ハラタク辯世ボンセイす。をひや等
の道シカウチを渡モスル行ムカシ道シカウチ也此度合モニタク沈モニタク也す。と故カタク依モカク遠州エイシマ
奥山オシマ六ヶ村ロクカムジにて庄屋マツル君門マツル莊屋マツル唱末モモニタク今水モカク高タカヒコ上安モシヤマ也此度
浪合記ラウハフ委モジム作ムス此狀モウタク於モツコトニ多モカク也。其後詩モリツ名モカクも
冥翁ミョウウ翁神社カツシマ也。の内モ半ハ譚海モタカシマ年モカツ良ヨウ行良ヨ良也。行良ヨ良也。あはれ
舞世モモシマ佐歌モモシマ樂瀬モモシマ旅モモシマ也。をもぐく深モモシマの湖モモシマも浪合ラウハフの意モカク也。
さして八代モトシマ也

甲斐國カツシマに小川原社カツシマ加賀見美信禮守モモシマ源光童モモシマを訪モカシ焉モカク瑞識モモシマ
中モカクノ家モカク存モカシり以モカシ驕モカシ也。のれ牧モモシマ山モカク生モカシ引モカシ責モカシ事モカク也
久モカクももれをもくと聞モカシきよ山モカクての歌モモシマす。ども君モモシマ臣モモシマ也。八代モトシマ也

主毛鳴モモシマてよめ。六名所方角秋モモシマ伊斐國カツシマを食モモシマ海モモシマき風モモシマ方角秋モモシマ
主毛モモシマの山モモシマはす。歩モモシマ水モモシマ浦モモシマ。直モモシマ丁富子モモシマ山モモシマ南モモシマ。もとお。黒駄モモシマ當國カツシマ
主モモシマ出モモシマ山モモシマ。主モモシマ小笠原逸見モモシマ佐木穗坂モモシマ也。地モモシマ主モモシマそりを。圓六
主モモシマ也。主モモシマ主モモシマ小笠原逸見モモシマ也。今鹽山モモシマ。不モモシマく、水モモシマは。主モモシマ主モモシマ。但モモシマ主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。
主モモシマ主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。
主モモシマ主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。主モモシマ也。

隨ひ放蕩在伏見の里深の遊安屋に遊びた後行跡ありて終
甲斐國左近せんの弟す隱れし鹽山禪寺を廃墓所とす
左近の弟貸の遊女を贈り給へ別の後文にて表すもかく鳥石と
ソ書家秘藏して貸すを又存りと云ふ事多きが故に伊集
の小野小舟吉左衛門と云ふ者古歌六七首を記せばも傳ゆ
を記手跡之甲斐信濃アシノと云ふ城の八宮の成年そ人秘藏
されど尊親王の成年跡之自詠も多く甲斐國生徒より

3. こうぬ肺代

雷鳴の音せん尾張三河をよむと桑原と唱、出羽陸奥城下にて
男女桑の葉を繋る拂頭及す桑の小枝を門々とすと桑の聲聲
雷動が此處を桑原信濃へニキム唱へまゝ地動のあら玉取の聲
がを唱へ多し出羽陸奥少は万歳樂シテと金持よけと要え

武烈天皇紀タケミタケヒをなめりて六月を度て關東大地震
中は通代卿の御詠タカヒコ、神津國平代ははをやまと名す、うこりぬ
はをやまとはをもくともせよ故にまほ万歳樂シテと肺代を祝意の
歌よ歌るハセリ奈韋小歌ナベコトハを歌り之

まみじのあづ

いまの世モダニをキヤウ歌カクをかゝ闇アカをさす、長ロングをいざす、六最手シシテ
じと五手ゴシテを打タマツて八巻ハチモンを打タマツて八手ハチモンを打タマツて相撲
の最手シシテと云ふ三代實錄四十九の巻ハチモンを見アリうつねウツネを相撲タマツて後陰アフターハイ
卷ハチモンをあらひの多くなり今モの世モダニもう闇アカを西宮記ニシノミコトの相撲
條トドケと最手額田成連シシテタケミツネ與辰宇治部利里決勝負シテスルとある辰と今モ
闇アカ小右記コウジと常時ノルメ也アリ又西宮記ニシノミコト江家次第エヌシに助手
をあら脇アラマツのてタ江家次第エヌシにまみじの事をシテ處シテ特異禮シテ著シテ

差紐を見て古今著聞集に鳥帽子袴形と著物をまとめて見たりす。化粧花物語根合巻は、相撲の事の如きの多くをもとめ、御番をばりし裸相撲の四隅の柱は御幣麻を以て、下方は化粧紙をす。尚ほ強手ではじめの御箭のひあをうらとしまひ、えの氣をそなえ。まことに取の出来て綾の袋の内に一巻の事をよどみとておなじく、五卷をまじ其事には、よしとて下は持たれとて、おなじく、夜一夜とかくと。此相撲もぎるば大勝をつゝてむきゆきと走り、金、くわせ、其事記とて其書くより。相撲を朝暮に神果駿余彦彦禪重より、士代の後世あり。活貝念五十枚、第壹天皇御宇用が節會行儀れ。其作法正し。

かず勝負どちらに分け、かゞへ聖武天皇の御神事は、諸國を除き賀清林をいすのをめじて、行司の役を立。相撲の式作法等悉く相撲志賀家、代古作法傳也。世の番は相撲節會に行坐す。或いは往々志賀家断絶り、八牛庄が席後鳥羽院の御代文治と改め、角力節會御執行のころは志賀家断絶なり。相撲の法式絶つてしむるのみ。國をぐんと誇詮議めり。前祖吉田豊後守家次より者、其頃越前國を守りて志賀家の古實傳承あるじをす。此事、歎聞連し追風ひ名をもまく。五位昇て朝庭の即會角力御行見つむ。海手の勅命た蒙。其時御團扇を賜り。相撲節會の御規式をばぞ。侍りてこゑ丈兵衛。相撲節會中絶せり。元龜年中二條閑白清良公於日本者角力作法す。二派分かく事也。一味清風も。御團扇蓋鳥帽子と御狩衣唐衣の四幅袴を賜ふ。元織田信長公。臣秀吉等。

東照御神君の御代まで出で給へ角力行司は久仰之元和五年四月十七日事名を紀伊國和歌山と東照宮の御祭禮より角力式相撲をもたらす其時より朝比奈總左衛門諸事申合せあつてやうその後より太刀拜領仕候より十五代追風より朝庭の伍相撲の節會は自然に臣中絶三條御家より角力臣懇意の如れば他に在る事無くまことに頼ひみて上よりは允の後万治元年嘗家へ召抱元禄常憲院様角力臣上覽の臣時代の方をも鈴木権右衛門より入門頼みをす上訪角力式を一通り教へて免を品この拜領仕候元祖追風を唯今三十十九代前との通禁庭又外へは臣家より拜領の品多く角力の當時諸國行司の免許出下り私家より人云々至細川越中守家来富善左衛門赤澤山相撲藍暢ヒ仁安三年九月十五日兵衛佐殿御狩リさ関八州の太小名頼朝公を慰めむか相撲をもとより伊豫倉館脇勇

なほめあり凡角力七十年も過ぐむころ保野五郎景冬川津記蓋
少番言ふ神前相撲安田家の事 四十五代聖武天皇御世より諸國より
稻を天子より受けさせたる人を禁庭へ召められて神嘗章七月始て相撲
の節會行し其時の行司は不頼太郎大助忠之其折より住吉加茂の両宮
神前より相撲を捕りて神慮を慰めむしほり行司終束式
神事神前相撲ニ鳥帽子白張指貫之禁中御節會ハ水干葛
袴平常ニ半臂アシムキ之但近草四布袴也白張指貫半臂水干
葛袴布袴肩衣石帶足片保衣美臺賈 元慶年中織田信長
公安主として角力上流の際時圓常寺源七郎官昇眼左衛門等万余曉
ゆる大力士信長公御入興のゆより重慶の侍等を賜ふ又常樂寺
の境内より角力臣上流のよび近國の僧俗より相撲ス政を以れど、
貴賤より群山至る京大坂伏見堺の名ある角力堂も數百人出づ

眼左衛門さるまつめをひのひよりすり拜領し重藤の弓は弦を外す東勇
四本の柱よ結ひ添置そなへし時の御興よ叶ひ羽は角力かくりきを扇まひより御荒れ
けふ北きたごん眼左衛門よ捕つかむぞ弓を柱よ結ひ置おきても幸さいめや九
枚まいの眼左衛門さるまつめ三番取會さんばんとりくわい三番勝得さんばんかつとく者ものあがめを捕つかむけあ
上意じょうぎ出だる事こと勇いさみを亦また眼左衛門さるまつめをせぢ立たてれ、眼左衛門さるまつめ脛きのう
碎くだき捕つかけや、眼左衛門さるまつめ三十番さんじばんを勝かつりて信長のぶなが收いび斜そよこ是
の弓ゆみを取事とりこと例たとい文秀ぶんしゅう頼公らいこう活なま時とき貸ありて角力かくりき興行こうぎょうのみ
少すくなき唐とう崎さきいい角力かくりき腕うでを破はて弓ゆみを捕つかんで名な揚あり、并そなへ繩なわ突つき身み穿うが穿うが手て
投なげ手て一いち負お投なげ繫むす投なげ居ゐ投なげ寄よ投なげ波なみ離はな間ま投なげ飛と投なげ捨す投なげ胸むね腹はら投なげ搜さ手て
手て貫ぬき投なげ四よ軍ぐん投なげ崩くず投なげ之の繫むす捕つか手て内うち繫むす外ほか一いち調斧しらぎ一いち足あし折ちり
繫残むすのこ一いち小こ袴はかま逃なげ一いち投なげ一いち渡わた一いち手組てぐみ一いち得知後ごじゆう一いち得と知し後ご一いち本ほん一いち捻ひね轉ひね頭かしら捻ひね蹴け一いち掌て一いち鬱うつ一いち居ゐ一いち行ゆき下さ力ぢ帶お惱うなづき

丸取まるとり得知後ごじゆう一いち圓洞えんどう一いち及手およて中なか一いち飛と捻ひね一いち壓お一いち
朽木くつき一いち傳友でんゆう繫むす一寸一寸一いち蒼花枕そうかしゆ入替いりかへ一いち天光てんこう一いち鐘木かねき
是四八手よんぱ一いち無勝負むしようぶ射形せぎやう一いち強弱きょうよ虛實きょじつ之の體たい土手どて有あ矢倉やくら在ある四手よんて蹠きゆ及およ繫むす
在ある胸むね皮は筋すじ強弱きょうよ虛實きょじつ之の體たい土手どて有あ矢倉やくら在ある四手よんて蹠きゆ及およ繫むす
在ある渡繫わた繫在ある結繫むすび繫在ある續つづ在ある手操てうしやう繫むす在ある相捻あいひね在ある居捻ゐひね在ある諸足よしゆく在ある引迴ひきまわ在ある一體いつたい一生いっせい射形せぎやう行合ぎょうあ在ある引捨ひきし在ある
肩かた傷きず寄よ在ある波離間はなま投なげ在ある過不及體くわいじ登足のぼりあし在ある休馬きゆま在ある九死一生體くしうじんたい土俵どひょう足あし在ある餘力よぢき體たい一説いつせつ在ある八柄はちがら在ある已上いじょう
合あわ手て一いち投繫なげむす捻反ひねはん仕掛しかく畠歌はたけうた
投なげ身みおの腰こしを寄よせて手て入い立たつ小こ折おり波離はなま一いち同雷どうらいの歌うた
投なげ身みを別わけつちやまま上う氣きをりぬるふじ 同繫むすの歌うた
かけがく手てはらまよよよよ腰こしはねがるもゆ 同翁どうおうの歌うた

掛けたるまつみの氣で承のうづけばそれが此指數
すこまばをせ茅はくまげ逃げて捨てまけ
そとひ捨て時々承にく腰心をひく引む。そりのうえ
前よし前もくさばすと其拍子を反の上へあれ。事のみす
必時氣を寝をかめと氣をせけ。捕り組みしみじみす
生捕せぬと思ふよとけ。生死もほゞし息をとらざむ
人の息は存らず。捕と組と其の數分多く唯勝者
相撲。廣場事。江戸神明社前。同深川幡宣前。同藏前。同
向院。同菖蒲町。南部。角土俵を。二間一尺五寸置
土俵十六俵。虹口四俵。入て二十俵。

○親方。江戸。此親方三十三人。京大坂頭取。小世翁。北親方。羈^き。

姓

の象業を。外の渡世まれ。公の額取を。裏覆三足復手を。及

此卷が東西軍の譲譁の事。ひそひそ六九龍出ちやう。若松山と云ふ
巖浪もはく。雷ノ音大。まぐさき。とゆ流り虫を。し。多。まく。
新猿樂記。星書類。従者。第百。文量部。妻。南子。云。六君。夫。高名。相撲人也。伯耆權介名。
日丹治。筋男。父。旁郎。即丹治。文佐之子孫也。母方。則薩摩。年は長之。
曾孫也。氣體長大。而形貌雄爾也。強力勇悍。奴手。恐三字。無競者。
内搦。外搦。且擊。小頸。小脇。逆手等。上手也。絡衣腰。又理髮。
髮際。庭。用心地。手合。氣色。腕力。筋股肉。支成骨。速外見。雷迷。
惑相敵。忽聽病離。佐伯。希雄。丹治。北男。丹治。是平紀。勝岡近。
江戸伊賀。枯九等。狹間。内取。大庭。拔手。未有。踵。汗。之。况。自。
餘最手。占手。諸國。貢御。阜。擬合。皆不敵。譬。如鼠。會。猫。雉。視。
鷹。若非。金剛力士。之化現。是可紀。八法師。之生来也。仍。蒙。最手。之。
宣旨。賜。八十町。免田。云々。及。至。此。而。活。金剛傳。ソ。二。卷。の。相撲。

書り日本相撲司御行事吉田追風門人松壽樓永革撰と記歌川國直
歌川國麿の画かあつてもあらはし序よりの事あ
式せたも念へとくいやにまよゑておひちりえしゆをせ
みまなこよ名ありて色ふかゆくわらすハ江豪第生を主され
るもするすまじく幕りをかまえれよかの世よそれじく
すくきて左右をあめせて三十人をうして一日のうちわふ十まい
つろひを油をせだすをあらゆとり七道の圍をあわせそり便り
めぐれとえひぬきよれどくかくあえれを世よこれづ
ちうくむろのかくすくなりしやいま世の動す方をとせ
最手助手井よなう入四百人よあすみ下さるすよしんの数
がほきもほのはをもなりとよくじよしよ松壽樓のゆふ
こよき好みの次をへてまよて林をくわふかづひよ

せむくらひれ、せめまむまなうこらゐすすひの術をすす
あほて二巻めすしをもつゝれがくとくくゆまゆえでどが
ろけめすとくかくすけよし、筋のねがくとくくねくなばえ
くもあねいとく興あるむはえ方けりいとやくの世
すじせちをあひなれど、ぢがりはすかまくとくふ
ろけめくめくがくづくをし経へとひづすとく、のりうき
はえつたよやもくきこちせすてこのとくをかまつ六樹園美
とをもよし三才圖會よ在、角歎の事をひげりとくの角取と出羽
陸奥よ在、鹿子頭踊りよはまくす方能併りすまひじてよ、下
きし四八手左のくじあれば、これを相撲突手シ故法四八手脇季
丸頭ヲテナフ反手以テナフ捨腰ヲテナスラ投足ヲテナスラ掛四
土手ツ四八手ナル反土一向反居反掛反寄反傳反撞木反

一寸反 跡墓跋 拳腕反 鴨入首 杠木反 衣蘭 捻 土
 合掌捺 扇スカニ 外天雙 内天雙 突落逆捺 クジキ 引落シ
 出捺 卷落 頭捺 片手ワノ 投ナ一 上手投 下手投 上矢倉
 引投 下矢倉 首投 カラミ投 摧投 寄投 出投 手杖腹投 八柄投
 掛土 二足掛 一本掛 内掛 外掛 手斧掛 障泥掛 呼掛
 渡掛 タクリ掛 掛モタレ 蛙掛 傳掛 手板 八手 手碎
八十手 絲土手 此外有ト云ドモ 口傳多ケレ便後とええりあり
 橫綱許 並許状 證文之事トヨツリナ
谷風権助執写
 免許

一 橫綱之事
 有著倉風権之助依相撲之佐令授與至某尾星之節是相用至是仍舊件
 寛政元酉年正月十九日 本朝相撲司御行事末代 吉田追風判
朱印
 あくじとええすい

吉田追風判

朱印

證狀

當時久留米御抱

小野川喜三郎

右小野川喜三郎今度相撲力士故實明第召加候依證狀如伴

寛政元酉年正月十九日 本朝相撲司御行事末代 吉田追風判 朱印

少文文家手弓取始元龜元年二月廿音織田信長公江州常樂寺於
 國中大力士召相撲御賀有チル三官居眼左門ト云者勝者無ツヒ御饗美
 トシテ御極藏ノ重藤御弓賜リケル又弦扇子ノ役相撲三番ナルニ最季
 斗リ饗美後其以下本意ナシトテ家手弓取手脇三弦小結ニ扇子ヲ
 饉養トシテ相撲をこし下ヨリ上古相撲之節會三召出セシ古今大方士姓名
 坐仁帝朝 當麻蹶速 野見宿松 弘光 佐治氏長
 天武帝一 大隅隼人 阿多隼人 奉光遠 長居
 淳和帝一 紀茂世 腹掛 大神惟明
 文德帝一 紀名虎 伴善雄 奈良藤次 蓬萊郎

筆の万石ノ三

廿三

一條帝一
後一條帝一

私市宗平 時弘 伊世田世 鶴次郎 藤塚目
勝岡 重茂 大武立郎 白河里法師 恒正 正國三郎

公保 小熊紀太 常時 久光 優使太郎 海浦也

直裏成村 荒願立郎 鬼王

日田永季 紀六 鬼大夫藏人

王雀

後一條帝一

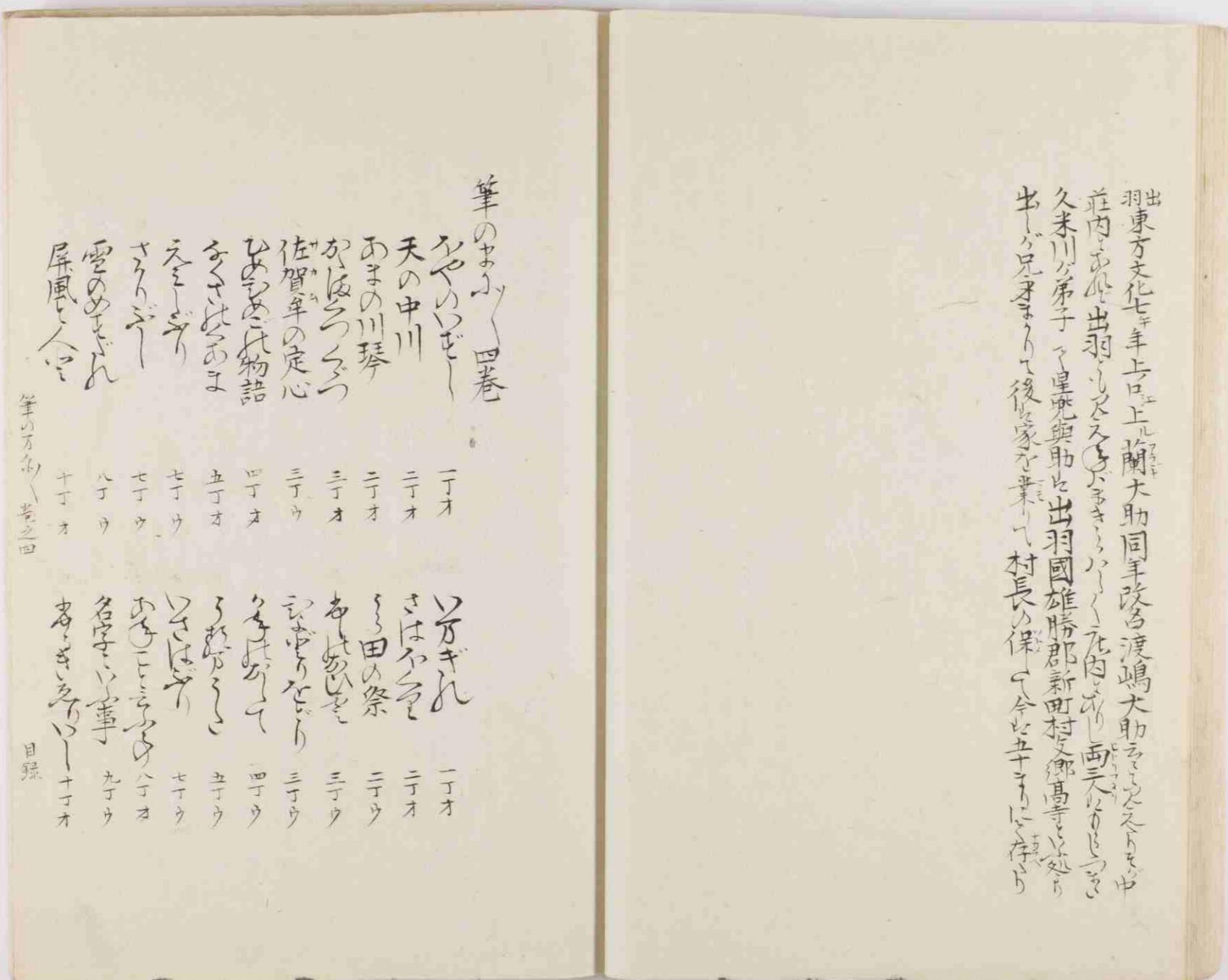
姓古今大力 小中太

鳥羽帝一 小熊伊遠 千手王 伊成

云々

よゑ人多す。古今大男姓名 鬼勝家之助 三尺
九紋龍清告 山下風嶽右衛門 六尺六寸
云々其外のまほじのけ六尺四寸八分二寸止りぬす。犢鼻禪の
あやく相撲節會の相撲人用之。今云廻之長一尺九寸餘又えむ。北圖
野袴俗よ歸込のゆせり。」亦袴はいのやれ新猿樂記近縁表

の事。出羽國雄勝郡の方言。犢鼻禪を小袴としませふ無相襲て方
をもす。こぼはく。此のに能ひかず。四季艸。犢鼻禪に牛の鼻に似る
也。意の多す。ヒヌえりまし。北出羽國から産し。相撲。源氏山吉太夫。東
文化五年二段目。附出。富士越吉太夫。同六月改名城取吉太夫。同八月
改名鰐張綱。奮鬥。同十一年幕江上。文政元年。改名源氏山玉川。出羽
西方。出羽文化四年。加年二段目。附出。出羽里德太郎。同十一年改名
文政九年。改名頂悦太郎。同一年改名玉川浪藏郎。出羽山峯奮鬥。
東方。文化七年二段目。附出。指石荒五郎。同八年改名陣丘倉。助同十三
年改名常山。文政五年。出羽山峯奮鬥。大江山原治。出羽大路。加年二段目。
附出。東方。星飛與助。出羽東方文政三年。加年改名。富士越出羽藏。文政五年
改名出羽森喜治郎。和田川金平。出羽東方文化十四年。加年。渡嶋大助。



横良方斯
 えいを
 菅家の真筆
 貞觀の行書
 うれみ
 うらら
 めひくのほし
 ひこうやさき
 さなほの朴
 ひやうえ
 ナウ あづみえむ
 ナテウ 櫻の本つり
 ナテウ 田舞 駒経
 ナテウ あらゆまこと
 ナテウ おうち坂
 ナテウ やうらう
 ナテウ あはねま室
 ナテウ さあゆがゑあ櫻
 ナテウ もうており
 ナテオ ぬくとも
 ナテオ ミトカニ
 ナテオ いづの杜
 ナテオ くほけの社
 ナテオ ほもば
 ナテオ 魚つで
 ナテオ ぬくとも
 ナテオ じふあ
 ナテオ さほくめ
 ナテオ さほくめ

サテウ止

筆の万葉ノ四卷

菅江の乃須美志

○名のいぞー

今それの海がやいす處をえぐ中にじかなやひがななみ風
 玉うつせ巻せんやそのいぞーのうりに肥前國の佐伯ひ難よをとふの
 あ紫色ひ海難ひ知かなま形ああわいと佐伯のいねがれ、兵士
 佐日記、そのいぞー生ひとひとへをき飯をしよまうをすり或ひす
 とえう、木夜、朱壁をひか名あく津軽、松前の海よ、ナキア多々
 もうえ、形あ、酢善耶モ、大酢善也モ、二種アリ、保モ、モ、漁
 境を漁魚をも、水を取て青森里人清物モ、されど酢寶也、琥珀
 道モ、今珍くさく水をも、名のいぞーとひやや、紫保也アリのいぞー

○筆の万葉ノ四

一

同書子ノは万年のもとより船記ササシ入江とて瀬名の橋サカシを通り時ハ黒木シラキ
ノ舟也度スル船也小舟又名舟を舟りて渡入江とて渡セし松也
中シテあはれどもく浪高タマシて入江アリて波濤ハタハタに打撃ハタハタ
おけサク中シテ波ハタハタせりしきがれやにえまこと松の木を
浪ハタハタをそぞろとくか波ハタハタもくわくをそぞろとくか波ハタハタをそぞろとくか波ハタハタ
坂ハタハタをそぞろとくか波ハタハタをそぞろとくか波ハタハタをそぞろとくか波ハタハタ
を瀬名の橋サカシありゆり今ち家ありす軒をやぐ人住居スル今切
此ハタハタ所の名ハタハタ三河國の高師タカシの瀬名サカシ塔
を瀬名の橋サカシありゆり今ち家ありす軒をやぐ人住居スル今切
神號ミツヒ佐神サカミと齊シテ事ハタハタ問ハタハタ公里コウリ公主コウノミコト池田正金齋タケダマサキンザイの頸ネックを加カ神ミツヒ祭
さハタハタ神ミツヒ祭ハタハタありハ北ハタハタより水ハタハタのハタハタ地ハタハタを主ハタハタ庭ハタハタふすと主ハタハタ應ハタハタ
下ハタハタ本ハタハタ生ハタハタ水草ハタハタの生ハタハタいれらの主ハタハタ處ハタハタ井ハタハタを掘ハタハタ試ハタハタせハタハタ
掘ハタハタ鶴角鉢ハクコハチありて銅墨タツモクの出ハタハタ何ハタハタいまとく又ハタハタいと玉タマを落ハタハタ

池田正入首タケダマサカル形ハタハタ身ハタハタあきやハタハタ、瀬名主サカシヌシをくハタハタ神ミツヒ齋サカミザイ止ハタハタ
事ハタハタまハタハタをうそハタハタ物ハタハタを養ハタハタ池田家タケダの往來ハタハタ故ハタハタ主ハタハタ北ハタハタ處ハタハタ後ハタハタて餘ハタハタ、

○天の守

同書跡ハタハタ遠江國ハタハタ天護ハタハタ川ハタハタ不ハタハタ天ハタハタの中川ハタハタ以ハタハタ之ハタハタ同トハタハタトハタハタ小
日記ハタハタ入ハタハタ今ハタハタ川ハタハタをハタハタ見ハタハタえハタハタ、此川ハタハタ水上ハタハタ信濃國ハタハタ誠
方ハタハタ湖ハタハタ落ハタハタすハタハタ人の歌ハタハタ諭訪ハタハタのハタハタ水ハタハタけハタハタじハタハタ而ハタハタ許ハタハタ中川ハタハタをハタハタ見ハタハタ
ま美龍川ハタハタ、天流河ハタハタ書ハタハタ記ハタハタを諭方ハタハタ不ハタハタトハタハタめなれハタハタ多ハタハタ教ハタハタ教ハタハタ前ハタハタ、

佐傳國ハタハタ澤木履ハタハタ立ハタハタ而ハタハタ深ハタハタ田ハタハタひハタハタ小ハタハタ草ハタハタ、
えハタハタくハタハタのハタハタ今ハタハタ川ハタハタ同書藤波ハタハタ山ハタハタえハタハタ北澤木履ハタハタ立ハタハタ、
夢ハタハタし當羽陸奥ハタハタ大足ハタハタ以ハタハタ至ハタハタ澤下駆ハタハタ村ハタハタ又ハタハタ越後路ハタハタ瀬下板ハタハタ篠ハタハタ、

○西の河琴

筆ハタハタのハタハタ四

同書^{アシテ}卷上^{アシテ}中原康富記云同年九月十七日太秋御門殿
被仰^{アシテ}云和琴^{アシテ}天照大神岩戸出給候時神樂器也乃六張並彈^{アシテ}
依之有六絃^{アシテ}生^{アシテ}不^{アシテ}え^{アシテ}す^{アシテ}かをト卷^{アシテ}琴^{アシテ}にのひ^{アシテ}ひ^{アシテ}と^{アシテ}裏^{アシテ}紙^{アシテ}
體源抄^{アシテ}和琴^{アシテ}事或人語云琴^{アシテ}佐木^{アシテ}長一寸八分半角^{アシテ}作^{アシテ}雁頭^{アシテ}
國^{アシテ}古^{アシテ}時^{アシテ}麥^{アシテ}琴^{アシテ}を^{アシテ}さ^{アシテ}て^{アシテ}は^{アシテ}之^{アシテ}の^{アシテ}う^{アシテ}を^{アシテ}摹^{アシテ}其^{アシテ}そ^{アシテ}り^{アシテ}古^{アシテ}傳^{アシテ}の^{アシテ}書^{アシテ}
琴^{アシテ}來^{アシテ}と^{アシテ}せ^{アシテ}は^{アシテ}箇^{アシテ}驚^{アシテ}い^{アシテ}す^{アシテ}之^{アシテ}の^{アシテ}う^{アシテ}を^{アシテ}摹^{アシテ}其^{アシテ}そ^{アシテ}り^{アシテ}古^{アシテ}傳^{アシテ}の^{アシテ}書^{アシテ}
之^{アシテ}中^{アシテ}に^{アシテ}和琴^{アシテ}六^{アシテ}神代^{アシテ}阿万^{アシテ}乃^{アシテ}波^{アシテ}古度^{アシテ}い^{アシテ}じ^{アシテ}め^{アシテ}そ^{アシテ}ど^{アシテ}り^{アシテ}私^{アシテ}恩^{アシテ}六^{アシテ}琴^{アシテ}
琴^{アシテ}驚^{アシテ}い^{アシテ}す^{アシテ}之^{アシテ}の^{アシテ}う^{アシテ}を^{アシテ}摹^{アシテ}其^{アシテ}そ^{アシテ}り^{アシテ}古^{アシテ}傳^{アシテ}の^{アシテ}書^{アシテ}
之^{アシテ}中^{アシテ}に^{アシテ}和琴^{アシテ}六^{アシテ}神代^{アシテ}阿万^{アシテ}乃^{アシテ}波^{アシテ}古度^{アシテ}い^{アシテ}じ^{アシテ}め^{アシテ}そ^{アシテ}ど^{アシテ}り^{アシテ}私^{アシテ}恩^{アシテ}六^{アシテ}琴^{アシテ}

田の事

ト田祭^{アシテ}尚^{アシテ}國^{アシテ}の^{アシテ}牧^{アシテ}岡^{アシテ}在^{アシテ}し^{アシテ}つ^{アシテ}き^{アシテ}か^{アシテ}も^{アシテ}日^{アシテ}し^{アシテ}ぞ^{アシテ}粥^{アシテ}を^{アシテ}享^{アシテ}立穀^{アシテ}の^{アシテ}

トわ^{アシテ}か^{アシテ}あ^{アシテ}い^{アシテ}す^{アシテ}を^{アシテ}な^{アシテ}が^{アシテ}み^{アシテ}よ^{アシテ}み^{アシテ}給^{アシテ}す^{アシテ}三^{アシテ}河^{アシテ}國^{アシテ}猿^{アシテ}投^{アシテ}社^{アシテ}は^{アシテ}ま^{アシテ}る^{アシテ}、
巨^{アシテ}父^{アシテ}社^{アシテ}北^{アシテ}禪^{アシテ}祭^{アシテ}アリ^{アシテ}、^{アシテ}此^{アシテ}古^{アシテ}田^{アシテ}の^{アシテ}春^{アシテ}神^{アシテ}事^{アシテ}も^{アシテ}都^{アシテ}通^{アシテ}巨^{アシテ}父^{アシテ}禪^{アシテ}御^{アシテ}神^{アシテ}號^{アシテ}、
少^{アシテ}出^{アシテ}け^{アシテ}る^{アシテ}あ^{アシテ}や^{アシテ}

琴^{アシテ}田^{アシテ}の^{アシテ}石^{アシテ}春^{アシテ}社^{アシテ}あり^{アシテ}下^{アシテ}管^{アシテ}鶴^{アシテ}の^{アシテ}神^{アシテ}事^{アシテ}と^{アシテ}す^{アシテ}信濃國^{アシテ}の^{アシテ}諏訪^{アシテ}か^{アシテ}春^{アシテ}社^{アシテ}
之^{アシテ}あ^{アシテ}簡^{アシテ}御^{アシテ}の^{アシテ}神^{アシテ}事^{アシテ}と^{アシテ}、^{アシテ}葦^{アシテ}謙^{アシテ}説^{アシテ}海^{アシテ}北^{アシテ}春^{アシテ}宮^{アシテ}の^{アシテ}神^{アシテ}樂^{アシテ}唄^{アシテ}小^{アシテ}、^{アシテ}主^{アシテ}事^{アシテ}先^{アシテ}
巨^{アシテ}父^{アシテ}社^{アシテ}北^{アシテ}禪^{アシテ}祭^{アシテ}アリ^{アシテ}、^{アシテ}此^{アシテ}古^{アシテ}田^{アシテ}の^{アシテ}春^{アシテ}神^{アシテ}事^{アシテ}も^{アシテ}都^{アシテ}通^{アシテ}巨^{アシテ}父^{アシテ}禪^{アシテ}御^{アシテ}神^{アシテ}號^{アシテ}、
少^{アシテ}出^{アシテ}け^{アシテ}る^{アシテ}あ^{アシテ}や^{アシテ}

尾張國^{アシテ}人^{アシテ}蚌^{アシテ}於^{アシテ}多^{アシテ}具^{アシテ}都^{アシテ}い^{アシテ}三^{アシテ}河^{アシテ}國^{アシテ}人^{アシテ}不^{アシテ}具^{アシテ}期^{アシテ}と^{アシテ}、^{アシテ}も^{アシテ}、^{アシテ}般^{アシテ}
蟆^{アシテ}子^{アシテ}祝^{アシテ}詞^{アシテ}の^{アシテ}中^{アシテ}、^{アシテ}谷^{アシテ}般^{アシテ}蟆^{アシテ}般^{アシテ}狹^{アシテ}度^{アシテ}極^{アシテ}云^{アシテ}之^{アシテ}え^{アシテ}、^{アシテ}

廬山記^{アシテ}天^{アシテ}將^{アシテ}雨^{アシテ}則^{アシテ}有^{アシテ}白^{アシテ}雲^{アシテ}或^{アシテ}冠^{アシテ}峰^{アシテ}巖^{アシテ}嶺^{アシテ}或^{アシテ}宜^{アシテ}中^{アシテ}嶺^{アシテ}謂^{アシテ}一^{アシテ}帶^{アシテ}不^{アシテ}出^{アシテ}、^{アシテ}
三^{アシテ}日^{アシテ}必^{アシテ}雨^{アシテ}、^{アシテ}不^{アシテ}出^{アシテ}不^{アシテ}盡^{アシテ}山^{アシテ}、^{アシテ}笠^{アシテ}雲^{アシテ}い^{アシテ}ひ^{アシテ}、^{アシテ}帶^{アシテ}不^{アシテ}出^{アシテ}、^{アシテ}
此^{アシテ}帶^{アシテ}雲^{アシテ}れ^{アシテ}ひ^{アシテ}、^{アシテ}雨^{アシテ}今^{アシテ}も^{アシテ}ソ^{アシテ}は^{アシテ}、^{アシテ}

富士^{アシテ}の^{アシテ}帶^{アシテ}雲^{アシテ}

○ さめじの定心

五難組云、嘉定て安井にて、僧徳明坐、玉山遊ひ也。す。尊を得
あきの僧、も菌の蓋、中で死り。そぐ中に徳明一人、薑茶を啜りて死を
免まつて、と獲どり。おほに死の事より渡り。おがの僧定心と徳明も
ひを糞汁を飲み、命垂れ絶やすれど、定心云、董酒をもつて、僧
成す。身をとりから佛心を汚んや。命を落だ死す。膚裂きほざき。北
事を聞じ、聞かず。ほびて、日本人の口と鼻とを譽す。今も、若申に日本度
牒ゆて、其僧姓平氏。日本相州行香縣、上守郷、元勝寺僧也。寧非命不
汚口、亦度幾陳仲子之風矣。と見えり。

○ ちよせうとくり
遠江國小じより躍りあり。其國内山真龍云ひと捕手を捕め
事を以て、天龍川岸小社のをめでて正月三日、吉日、男女聲集じて踊る

○ いえもの物語
あきの唄、神の杖、木と本末千枝ちえをもやの、三十三本は
榮きよみよ。桺の木の本と枝をねねがまよひ枝よ止て、花若ち
まふと、おまかせを、つまむい、あめうきく、よもよもよしり、

○ いえもの物語
名は、膽澤郡、西根をよし山郷と、丁女を姫、もし嫁を娘子、處女耳、
罕と、高き女を御子、御子とよび、夏末の植樹のも葉採りて、和庭の
下敷を、あま、財、其祝うてあれにめけ、事なれば、紫竹のは葉を
ぬきら紙の如くの家、おとづれ、あひくは葉に煮を盛り進みて、櫻
袴で、左扇子を左と右と盃を持てて、舞すに、酒と酒と、
琴やせがおどり、おどり、おどり、おどり、おどり、おどり、おどり、
よかて舞ひと、おどりたす、おどり、おどり、おどり、おどり、おどり、
おどり、おどり、おどり、おどり、おどり、おどり、おどり、おどり、おどり、

羽の筋ひすて綾奴すまて垣垣間猫す身の漬けぐいと老女
芭をまねた麻苧の縫をぬき其詞小縫とい之綾奴もつれやわきえ
づれや其品して詞をさむりびと万を垣の間に事を重すて
垣間をを猶をのぐりうくかれのまゝあらゆの子はき業と開夫子
の衣をからにそや秋深て寒くつれせよ壁よゑくきりかまふ老女
まゝさきをすわづく、衣をきどりとひ若嫁をあがともし私をき
ちどれ、植の実をび不蝶をなづくとぞうめう七夕の夜とくまごおひそり、
衣を衣とへ古言とまゝめうへ誓約ことあらやすと同日田名蘇近浦
ノイ新祐を新祐衣とすいりともき美言のを残りく。

かみせかく

相模國の石平の石平寺にて禪宗の寺の北寺の開闢、鎌倉三天帝
鎌倉郎、武、晩年出家せり人や正三派の僧侶止静のき結跏趺坐て

先手を以て胸打、小事を打りて、鎌木正三胸を敵て大悟サトウ。一トアリ、
まゝ同國の大雄山最乗寺より禪林あり、其は萬本少弔て令停止、事を
書、其は戦國の世の事。今、残きむじ。北寺の升を握り、内ノト銅
のおり、其形と文字のまゝに讀むか。古水神のとみゆきと、北印を
朱肉小押、今、ふ擁護する。頸かけあづらひをあつて、刃の柄
巻を火災を避よ。桿柱亦舟へと楫帆柱山ひ。今、北寺小室と
不得あづらひ。持する。今、家の珍寶を此印を最乗寺の御紫銅印
と、十寶曆明和のころをじめ、僧比印押を長崎守持至清公名せ
久瞻ひと享元貞大徳をの世に肆家の家に持す。あくべり

なべよけあわ

文化七年の秋九月廿日紀伊國名草郡加太浦ある淡鳴大崩神架社
の社家坂本左膳直房は、の名を吉彦ひ人をかう久保田の旅館小

訪し美^{アシ}さひ^{アシ}語^{アシ}テ云^カ白風の^{アシ}御簾^ス一丈八尺の里^{アシ}裏^{アシ}筋^ス
鳥^{アシ}の^{アシ}ひり^{アシ}掛^{アシ}り^{アシ}よ^{アシ}の^{アシ}事^{アシ}と^{アシ}陰陽^{アシ}を^{アシ}こ^{アシ}れ^{アシ}と^{アシ}み^{アシ}紀^ス
國^{アシ}小^{アシ}瑞^{アシ}正^{アシ}キ處^{アシ}女^{アシ}の^{アシ}も^{アシ}里^{アシ}髮^{アシ}云^{アシ}と^{アシ}セ^{アシ}北^{アシ}事^{アシ}を^{アシ}奏^{アシ}ハ^{アシ}
御使^{アシ}久^{アシ}の^{アシ}天^{アシ}武^{アシ}天^{アシ}皇^{アシ}の^{アシ}御^{アシ}后^{アシ}ハ^{アシ}セ^{アシ}給^{アシ}ハ^{アシ}あ^{アシ}其^{アシ}妾^{アシ}
出^{アシ}家^{アシ}永^{アシ}ハ^{アシ}兄^{アシ}海^{アシ}士^{アシ}の^{アシ}家^{アシ}九^{アシ}泉^{アシ}郎^{アシ}也^{アシ}久^{アシ}の^{アシ}家^{アシ}を^{アシ}世^{アシ}づ^{アシ}き^ス
御坊^{アシ}本^{アシ}僧^{アシ}坊^{アシ}也^{アシ}久^{アシ}の^{アシ}其^{アシ}御^{アシ}坊^{アシ}の^{アシ}家^{アシ}の^{アシ}妻^{アシ}娘^{アシ}を^{アシ}世^{アシ}ふ^{アシ}事^ス
日^{アシ}寄^{アシ}縣^{アシ}神^{アシ}子^{アシ}の^{アシ}業^{アシ}を^{アシ}せ^{アシ}り^ス天^{アシ}音^{アシ}山^{アシ}道^{アシ}成^{アシ}寺^{アシ}天^{アシ}武^{アシ}天^{アシ}皇^{アシ}勅^{アシ}願^{アシ}所^{アシ}て^ス
世^{アシ}道^{アシ}成^{アシ}卿^{アシ}の^{アシ}建^{アシ}立^{アシ}テ^ス

琉^ル球^ル國^クの^{アシ}白^{アシ}風^{アシ}詩^{アシ}テ^ス其^{アシ}國^ク王^{アシ}の^{アシ}書^{アシ}と^{アシ}況^{アシ}抵^{アシ}扇^{アシ}子^{アシ}ハ^{アシ}九^{アシ}集^{アシ}も^{アシ}御^{アシ}
露^{アシ}ち^{アシ}も^{アシ}御^{アシ}到^{アシ}菊^{アシ}に^{アシ}也^{アシ}と^{アシ}自^{アシ}都^{アシ}に^{アシ}贈^{アシ}来^{アシ}事^{アシ}あ^{アシ}と^{アシ}
傳^{アシ}聞^{アシ}人^{アシ}話^{アシ}り^スす^ス身^{アシ}の^{アシ}南^{アシ}部^{アシ}の^{アシ}船^{アシ}會^{アシ}居^{アシ}名^{アシ}御^{アシ}都^{アシ}鳴^{アシ}別^{アシ}也^{アシ}通^ス

半^{アシ}兵^{アシ}衛^{アシ}セ^{アシ}リ^ス勇^{アシ}風^{アシ}大^{アシ}それ^ス琉^ル球^ル渡^{アシ}其^{アシ}輿^{アシ}を^{アシ}経^{アシ}て^ス瘤^{アシ}求^{アシ}み^スの
遊^{アシ}享^{アシ}す^スの^{アシ}は^{アシ}が^{アシ}ひ^{アシ}ま^{アシ}い^{アシ}唄^{アシ}ひ^{アシ}謡^{アシ}と^{アシ}き^{アシ}く^{アシ}う^{アシ}の^{アシ}と^{アシ}ぬ^{アシ}付^ス
此^{アシ}翁^{アシ}の^{アシ}土^{アシ}持^{アシ}の^{アシ}家^{アシ}を^{アシ}泊^{アシ}て^スあ^{アシ}いた^ス「^{アシ}一^{アシ}ま^{アシ}こと^{アシ}も^{アシ}せ^{アシ}じ^ス」^{アシ}不^{アシ}
身^{アシ}も^{アシ}ま^{アシ}ま^{アシ}も^{アシ}ぬ^{アシ}く^{アシ}か^{アシ}り^スえ^{アシ}む^{アシ}の^{アシ}「^{アシ}う^{アシ}ト^{アシ}ま^{アシ}の^{アシ}小^{アシ}舟^{アシ}」^{アシ}人^{アシ}け^ス
「^{アシ}あ^{アシ}ま^{アシ}、^{アシ}ま^{アシ}も^{アシ}あ^{アシ}け^スく^{アシ}あ^{アシ}り^ス、^{アシ}え^{アシ}む^{アシ}の^{アシ}」^{アシ}と^{アシ}や^{アシ}う^{アシ}て^ス鳩^{アシ}地^{アシ}名^{アシ}、^{アシ}森^{アシ}
あ^{アシ}い^{アシ}ら^{アシ}流^{アシ}き^{アシ}を^{アシ}え^{アシ}す^スれ^ス、^{アシ}み^{アシ}れ^{アシ}も^{アシ}じ^{アシ}た^ス波^{アシ}、^{アシ}お^{アシ}の^{アシ}じ^{アシ}か^{アシ}ま^{アシ}の
三^{アシ}あ^{アシ}、^{アシ}乞^{アシ}の^{アシ}歌^{アシ}、^{アシ}ふ^{アシ}な^{アシ}き^{アシ}考^{アシ}宋^{アシ}殷^{アシ}語^{アシ}、^{アシ}良^{アシ}好^{アシ}、^{アシ}事^{アシ}、^{アシ}屋^{アシ}
ひ^{アシ}か^{アシ}ん^{アシ}、^{アシ}明^{アシ}和^{アシ}、^{アシ}か^{アシ}じ^{アシ}豊^{アシ}前^{アシ}國^ク小^{アシ}倉^{アシ}、^{アシ}琉^ル求^{アシ}み^ス入^{アシ}津^{アシ}、^{アシ}綿^{アシ}房^{アシ}
を^{アシ}ま^{アシ}急^{アシ}得^{アシ}、^{アシ}國^ク小^{アシ}販^{アシ}、^{アシ}ひ^{アシ}き^{アシ}う^{アシ}人^{アシ}綿^{アシ}打^{アシ}、^{アシ}師^{アシ}、^{アシ}ひ^{アシ}告^{アシ}、^{アシ}ほ^{アシ}ふ^{アシ}
ひ^{アシ}ひ^{アシ}、^{アシ}販^{アシ}、^{アシ}綿^{アシ}打^{アシ}を^{アシ}業^{アシ}、^{アシ}世^{アシ}を^{アシ}せ^{アシ}ま^{アシ}ね^{アシ}く^{アシ}と^{アシ}師^{アシ}、^{アシ}餘^{アシ}波^{アシ}
を^{アシ}北^{アシ}道^{アシ}、^{アシ}奥^{アシ}議^{アシ}、^{アシ}傳^{アシ}、^{アシ}家^{アシ}諸^{アシ}、^{アシ}ア^{アシ}五^{アシ}、^{アシ}ひ^{アシ}ふ^{アシ}六^{アシ}、^{アシ}綿^{アシ}打^{アシ}の^{アシ}を^{アシ}
互^{アシ}綿^{アシ}う^{アシ}家^{アシ}業^{アシ}、^{アシ}半^{アシ}も^{アシ}、^{アシ}半^{アシ}も^{アシ}、^{アシ}み^{アシ}き^{アシ}か^{アシ}じ^{アシ}も^{アシ}、^{アシ}互^{アシ}綿^{アシ}打^{アシ}の^{アシ}を^{アシ}

此方の師を、弟子をもてあらずかんふくせに仕ひす
つと餘れむれとくまもとまうのゆゑにゆきとてをり、
尼をもむまきとばす、まれさまとて其事流行家も衆行侍二日、
来せちふとす、於か菩提寺沙門が教説ひれ侍や世を、
あれ夫達師沙門つとも多そとあり、わざと僧もてせんじて、
硯もだ、墨もとせ、ま紙あまり生て筆をもとめり、錦曳の祖ハ
鎮西人郎為朝鬼、鳴渡弓力試給し、もと鳥人の袖もと手
弦風小葦花の如く、ま飛散りとて、築紫人木綿と弓とま清
綿弓とて、まてのをしましよをすもひ、そよよよて、卷て贈り、
うれ乃人、じよらじよ、琉求御、後大布あはりを贈り、
小倉の詰め、まをみくふもいの、琉求人小倉と俳諧取
うな万人の句、小倉をねじて、わぞや臘月、じり、これ

台
台シクワヒ室中之事をうそ半なめての事とシクワヒヤモとの國の内ハ
琉求誌を庶民より貯えり、今の琉求ハ為朝の後間スヒ書シテ、
歌をもほもあま、國の古風エビ多く残り、ト、倭訓葉小琉球國ハシマ、
賀の初ハタチより歌、よのぬらしや、余もりがたちもつぬくたまには
まだやきやあこよ、琉球の歌と春正の傳ヘリり、春正六、大納言
資慶卿の門人アシカニのさういや、今日の福、やき、おふりがたちも
と何喩ハシメす、琉語、度ハシメたるをあひ、尊人ハシメ花の今、ほやきや
あこよ云、道ハシメふ處ハシメと如くの良ハシメまを、常ハシメせきやれ、ト、
キと名ハシメ前ハシメ存ハシメし、琉求ハシメ、めう譲ハシメ、もとよ、喩ハシメんぐ、ま
玉勝間ハシメ、琉球國ハシマ、やさんとて、ハシメまなまハシメ、アホハシメ、
キやかんハシメ、神ハシメかきハシメて、下ハシメ、アホハシメ、
を駒ハシメ、ハシメついたまハシメ、駒ハシメかのほ地ハシメ、ええ

なき集シマタ一やかの音の説カタニ中、越後カムシキ下蒲原郡カムシキ
柏原カツラギ久慈クルシがやつげふきて、さじるまく地鳴チヂミ音を止スル、
きよけゆつをかく詞カタニはやり、仰ハテり、此筆シシキの主シメひま
あくし語カタニ一二イチニを三ミ。

○えもん

「おとんふりしまシマニかねばぞく。あーをひつてり海シマ
ひとを、家カミ君カミをすと鳥トリかく氣カクシがいし。
○えもん

良ラブ夫ラブ来カミ侍サムライをせこあへ戸アヘトもとす、鹽シロの水ミネもとす、
君カミすよ近アマてアマ、奈ナガあげアゲ海シマ川カワをとくをれや。

○南詣ミナミナリヤ

○盛カタニ浦カムシキのためアメかとあが、奥カタニまでたくなれカタニほまカタニ、奥カタニ渡カタニ鳥トリまつま。

○あね

おはなしをう人の名をひだりましめ合ハマハシ、某カタニ父カミ
母カモ賤タレ人ヒト常カタニあみをうし太郎タラ夫タラ婦カミをうきしめ合ハマハシ、次郎
嫁カミをばくまし、はこをうひまつり、松前カタニ長タケシあき、次
郎タラあ、三女ミナの四女ヨリあ、次郎タラ娶マコトて家カミをつくりし、某嫁カミをあくま
え夫カミ、次郎タラ娶マコトて元カミひき、女カミり末カミ女カミ詞カタニ、大カタニ仰カタニ、勇カタニ娘カミ、
をあひこ、三女ミナをうしめや、南カタニ部ハ第カミ嫁カミをうきまき、
其カタニ孫カミをうきまき、古カタニ詞カタニ雅カタニ言カタニをか、誰カタニかうきまわせ、
言カタニ俗カタニのいカタニあれあけきめひ、尾カタニ張カタニ國カタニ存カタニし、熱カタニ
田カタニ神カミ社カミの神カミ禄カタニて、人カタニあ、其カタニ言カタニ中カタニ日本武尊カタニの神カミ詠カタニ、お、左カタニ
中カタニ北カタニの孫カミて、よし、くらものうそカタニをわまくし、太氣カタニ能カタニ疑カタニ定カタニを、
子カタニ尾カタニ張カタニ國カタニの玉陽カタニ鞍カタニ藤カタニ原カタニ熊カタニ往カタニの着カタニ、詞カタニ草カタニ花カタニ、お、左カタニ壁カタニ

名も足をりず千反称と則根と本と之意を以て男女とも称す
 詞中また故日本根子をと称する尊号多く作り又今云阿祢アミ
 云國史中万葉小見アサヒ侍称也執田大神の寛平縁起カネハラ中少
 日本武尊於甲斐坂折宮有戀官酸媛アシタツ郎歌曰阿由知何多御荷
 称古波和例許年止登許佐畠良年也阿波禮阿祢古波此錄記八
 正きぬ事アシタツハ爰アシタツシテ是アシタツヒニ今ハめぬり詞アシタツヒテ為アシタツム之
 女アシタツしたる詞見アシタツシテ垂仁紀小日足アシタツハ養富子アシタツを養アシタツ事
 母アシタツはら母アシタツの發語アシタツニ亦後アシタツたち往アシタツ父アシタツの母アシタツの發語アシタツ
 を父アシタツ古例アシタツあアシタツをゆうそえりエクモの安種アシタツヨリ詞アシタツヒキ世
 をひこしませアシタツシテヤビトアシタツヒキアリ

雪のめぞざれ

口はかのくニ玉手アシタツのちをアシタツにて雪冒アシタツて眼煩アシタツ事アシタツのまし雪冒

字が雪アシタツを立して雪廢アシタツ行アシタツ人の家アシタツを立して雪アシタツを眞瞽アシタツ
 の如き頭アシタツをもあつまし生アシタツ人アシタツ小りあくま事アシタツ雪アシタツは小住アシタツをばん
 金アシタツを掌アシタツ其アシタツまづ玉アシタツをあけまし思寢アシタツの立アシタツ町アシタツをあくまう片目
 をまき右の目アシタツをあくまう左の目アシタツをまくまう主アシタツまうめ眼
 つをまくま家アシタツはうりていさまくまう眼羅巾アシタツはふみのまき紺布
 まう眼アシタツをわい拂アシタツ雪アシタツまれめぞれめぞれめぞれめぞれめぞれめぞれ
 疾合アシタツておこれを拂アシタツ是アシタツ拂アシタツ雪アシタツ旨アシタツをあくまうめぞれめぞれ
 月アシタツあり照アシタツまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
 月アシタツ舉白集アシタツ云原氏物語アシタツとせて興アシタツ幸四帖アシタツ草子アシタツやまくら
 えまくら行アシタツいと聞アシタツさくめをなむく見アシタツやうふまくら
 ほめうてじぬまくらをアシタツ育アシタツをりい暑アシタツきにけとすまくら内アシタツ

さのほのまゝ形下れりやあ、あやめを身をも各々
を、まかひがみの北調度に、かく見とれど、是にすら、
まて、雪路の日、三月の日、日び、雪路の日、
も、さりとて、わづはまのをえ。

○名字と字

片里舍と定めて、せりゆきを名づけ、草名を、草
の三河國衣、黒田御謹門、立井と申す。源氏名、
智、室の、と、錦木の、餘風、世、唄ひ、一、おひ、草
は、おひ、玉、都主、七、卷井、小、櫛、多、子、名、草、
談、秋、別、記、公、安、四、年、賴、長、公、養、女、入、内、子、う、草、學、模、様、江、
近、代、聞、訓、不、悟、字、等、見、候、如何、就、多、字、万、佐、重、訓、儀、修、神、妙、
覺、候、子、細、只、今、參、入、可、念、言、上、候、状、如、件、八、月、吉、大、外、記、中原、

師安讀、せりゆき、名、草、と、こ、と、え、と、の、四、部、謹、草、字、す、
名、の、ト、レ、ト、姓、と、類、多、け、六、名、草、と、い、い、名、の、と、ふ、と、く、り、
と、く、ひ、来、と、う、と、か、む、と、な、の、て、片、里、舍、と、い、き、事、い、多、く、

○屏風と名

世、諺、屏、風、役、と、ひ、立、れ、し、り、古今、著、聞、集、為、輔、中、納、言、
口、傳、少、か、れ、竹、を、人、と、屏、風、と、い、く、ま、屏、風、と、い、く、い、う、
と、み、る、命、を、も、と、ぬ、れ、が、い、能、と、あ、く、と、あ、手、と、す、れ、が、く、る、
と、み、れ、え、す、り、と、屏、風、と、い、く、あ、手、と、す、れ、う、ば、き、り、ぬ、く、と、
と、み、れ、え、す、り、と、屏、風、と、い、く、あ、手、と、す、れ、う、ば、き、り、ぬ、く、と、

と、み、れ、え、す、り、と、屏、風、と、い、く、あ、手、と、す、れ、う、ば、き、り、ぬ、く、と、

○名、字、と、字

出羽國鶴郡、吉郷町、山、山、山、地、藏、寺、碑、裡、龜、石、菩、薩、を、
華、の、方、角、四

刻も之古園仁大師の筆を手する者すと、今は止む。やや思ひ
あくさくかし入る事ハ、水うちもあひがめんが、さうが
萬字三種字あり其様形を以て画書きし柳葉碑で今一夢のものと
在りてす。さうりきのまゝ承和五年日為破法尾彫也。
之の法尾は、ソシス人をも、元亨釋書ナガ法尾にて法華經持者
ハ、多高き今ノ方郭より立ちて、下りて元亨釋書ヲ時
記され考ます。又、或僧云妙法尾世よまれ、かく、その行跡
滅後爲追慕して、碑と云ひし所に立てて、碑を立てて、此等の
御此等の書や慈覺圓仁大師の書給て、ふとおも筆三種卷
重觀四年條小園仁承章七月二日者、大唐揚州海陵縣に見えり

○ 法尾寺

いはかはりて妻の夫の事、高きを落す。男妻八十歳矣

中里を差し木りて半格を寸分少作れ。左を朱守、右を朱守、
事務替の前句十のこじし始てひをもと。向題未嘗
まゆす。氣ばかり、そむけ、半格。八大をも、八大をも。書字
東北前句も、そも。女の八大的、飯籠も、飯匙も。大もを教
作で、大もを。左を贈す。送り、戸主を家に。先ツ飯匙を
えり取る。女妻を覽て上方見あり。されば、まよ拂ひ、まよ
合す。とぞす。範贈をもとす。

○ えのえほじ
俗言ふえづみえじ。今いへどもはくに。古言はくをもふ
かく。苦て。愛恨流り。衛と。事ハ天智紀。えぐ
ぬす。

○ あら書し山谷衣室日記中。白雲の重ね山。八重宣平群の

そひておもむく想ふ風すゞに谷を臨み河の水が海せきこゑあ
よ旦路をまわる賤房の居す浦すを王斯理といひ
今のそりばく千町の中路を以て朝霜と神を寒くむけ
ちばくちく笑のまへとぞえよふ
雨よりぬれぬくをばく久衣彦の名て半残る衣の半甲
み事より久延既古に曾富賜りと今の世よりぞぐるをし
かじかのひ之誓事古事記傳土巻山はを之

雄鹿吉名の増川邑下雷殿八幡ノミ神社あり此事小神齋ノミ
その君を忠宮君唐ノミ木榎木境ノミあり二五萬ノミ奉木榎木
をうゑまづノミを稱主廟ノミ此吉塚の近邊ノミ株ノミり硯あり

其硯の裏小幾羊形見筆之跡不覺染拭涙由首ノミ左ノミ右
七日初ノミ之時戲書ありすい黒塗の木復ノミ半身紙残り及
北社ノミ徳四軍ノミ安東太郎平春建亭ノミあるの名前首ノミ代後園
院御坐ノミ徳四軍ノミ改元ありての年号を康平ノミ半宮君善哉ノミ歌ノミ一さくふくす歌一首ありふくせをもうノミを作

○しるべ

出翁國秋畠郡南荷莊生所ノミ重の主所權現ノミ祭ノミ能野御舎ノミ
今之藥師ノミ土神ノミ祭ノミ半身、半身所ノミ名に齋ノミ正神ノミ是まこと
些所權現ノミ陸奥國津輕外ノミ濱の内大濱村生所權現ノミ比内莊生ノミ
生所ノミ津輕大濱社ノミ獅子頭ノミ内ノミ秋田庄所ノミ其三ノミ作ノミ見合ノミ
津輕大濱の主所權現ノミ此島大納言原真氏ノミ建立ノミ棟札ノミ筆者ノミ
花萼四邊ノミ將忠長ノミ棟札ノミ金光明寺傳國多門天牛寺梵見大菩薩建

三後熊野坐所權現勸請於牛房寺幽藏方時勸進小幡東覺坊
 舊社有小宮其村名云本宮奥州栗原郡二直莊文字村アキラキ二十
 窮アキラカニ湖津徑の耕田山南麓在本宮すい李村リリイ吉跡名寺也

○菅家の御筆

菅神御真筆出羽國雄勝郡横尾郷戸部氏の家藏シバヒタシ甜紙小
 金泥の御書経文の目録也其文小文殊師利根本陀羅尼經卷
 ト太宰明王經三卷ミツコトノミコトノミコトノミコトノミコトノミコト七行小在北戸部氏の家系譜戸部新左
 衛門尉政直今川殿四門家スガハシ為伸織田信長尾州笠寺在城号戸部
 弘治三年八月朔日於駿河討死法名神所住長樂寺祥宗方よりえり其末胤戸部恩
 予アシテ開齋永慶軍記編集の下アシテ家々の系譜アシテなまじ高野平慶
 がりや三年正月經アシテ満尾アシテ寺りをひき後水戸の満福寺アシテ戸部
 の通す春中かほほはなむるアシテ此山家坐アシテ恩僧事故

早二通強及多篇奉存アシテ往來至て奥羽永慶軍記之儀大君光圓公之
 連上承衣殊々無匹甚色も歴然アシテ也而五はねよと並極陞
 陞れど此事もとあく思慮方アシテ出立アシテ此事内アシテし極依頼之傳
 共大田昌長而相川嘉兵衛方アシテ慥相届アシテヤシ折食大君アシテ此事もと並給
 与アシテ後佐嘆美坐アシテ歎詠アシテ可有感アシテ之承角アシテ殿而面アシテ接海アシテ、
 戸部一開齋 満福寺アシテモアシテ

下アシテけアシテさアシテる事アシテつて西山公の送アシテおアシテけアシテ一敢齋心中アシテ心アシテに

○田僻アシテ節經

かか横櫛の永慶軍記作者戸部新左衛門某一開齋アシテ画アシテよみアシテかある屏風
 小正月アシテは二方歳貢アシテのびり田アシテうちアシテらアシテより三月アシテ開鑑アシテ花見四月アシテ
 めうまアシテはくじ田アシテ五月アシテのぞアシテぬアシテ鉢アシテいアシテりアシテてアシテゆアシテゆアシテを
 田アシテ六月アシテ心太アシテ水アシテあアシテびアシテ七月アシテ躍鑑アシテ高燈籠アシテ八月アシテ月見アシテソ耶アシテ

九月紅葉新穂積十月^{ヒホツム}をまくすりとせあうす。十月鷹狩貢
の米の雪車。十一月寒い水匂行ひて、せきん未踏かちつき。冬月
今世ふらも下り見えにと。青田うら多木稚猿画帽。烏帽子じねはばさたり。袴かけ扇。ちひし。田舎翁。編笠。女マダラ
編笠。小簾。黒の衣。のの着。枕呑入。ちめ髪。手。女。小け
アリ。も教。金。足。吹。ド。モ。鷹狩。の。そ。し。と。手。モ。賣立
わらみ。掛。今。腰帳。ほり。元禄四年。背吉日。書り。こ。夏。夏
餘年。ひり。ひ。三。は。ま。ひ。一。夜。まで。田舞。ひ。京。し。アリ。倭訓。琴。小。
田舞。大。穿祭。小。延喜式。見えり。多治比氏。内舍人等。傳人。とも
伊勢太神官。田。多。か。田。傳。仕奉。事儀式。帳。定。アリ。
五。考。三。河。國。衣。里。寺。部。里。ま。田。う。よ。に。編。木。傳。儀。付
も。節經。リ。の。や。う。歌。ひ。き。て。三。甘。寺。う。伝。か。し。ひ。じ。ま。ひ。付

さう。く。よ。る。や。す。で。せ。じ。長柄。紺傘。ト。ト。の。ふ。ハ。鳥。の。す。て。あ。れ。六。雨。鑿
の柄。竹。枝。を。つ。そ。て。ざ。り。け。ぞ。セ。テ。三。線。浮。瑠。璃。半。田。中。路。す。り。ま
群。小。い。く。が。ぬ。節。經。の。餘。風。み。の。田。舞。を。の。返。る。を。の。節。經。説。經。を。び
畫。説。經。を。い。事。か。り。一。か。ハ。唄。ひ。し。之。ま。浮。瑠。璃。大。夫。ノ。門。第。祕
曲。傳。受。ト。キ。先。む。説。經。を。二。曲。説。事。ア。リ。今。父。も。下。を。も。北。
淨。豐。利。ノ。説。曲。三。河。國。矢。作。金。高。長。者。守。淨。留。羅。禪。曹。牛。若。君。を。ひ。
猿。の。人。脚。ふ。の。君。人。も。れ。餘。レ。と。セ。を。ま。ニ。海。哥。大。美。川。大。美。川。未。名。
小。家。が。被。今。き。を。淨。瑠。璃。潤。の。名。ふ。ア。マ。姓。モ。シ。千。共。夜。冷。泉。モ。布
め。お。あ。い。姐。の。死。後。三。底。可。て。姐。持。ひ。シ。か。父。モ。シ。觀。音。を。鑄。て
寺。小。納。明。大。寺。村。古。直。下。蘭。の。成。就。院。祖。坐。て。之。鏡。觀。世。音。密。全。善。
支。姫。の。手。馴。の。琴。モ。鳳。來。寺。れ。峯。院。の。寶。物。存。リ。女。鳳。巣。寺。の。峯。林。藥。師
佛。の。願。す。な。瑞。瑠。光。如。来。少。ま。す。淨。瑠。璃。燭。前。上。留。禪。姐。モ。父。今。上。留

理水冷泉より事跡より、江戸冷泉より北本を草薙原、
公意遣てけらるゝをすて付す。節の名をじとす。小野を源、源風殿傳、
そが中も上田瑞姫の事をほんと書たり。上曾理は、益子の謡の名。
かひき、生段内公節經のふうき意をすすり事。や。

○きらかくらく
秋田久保田の五才嵐葉介画兵を、泉齋嵐兒は、嵐兒とぞ、蝶痴人草すて、
今於れにあひて、此眞景を、小屏風一枚松かばんづるをすま、之の
たゞかくす筆を示すがくとて、すばに得て、よきゆゑを、太刀屋、
菅原春水訪び集と北圖を、手立てかりて、いそゞは是繪板を、
鷹骨折と世説に此事にて、嵐兒は、ひづれをしけ、や、と聲を
詰め、そと、無原寺の是觀主、その印板の圖を見て、風嵩而屏風をなれ
し書あひ、も、蝶痴今繪堂より外がふじておがくまよせく。

あでの牛モハチ、飛鳥川のあちせと、仰せば、世のすまをめり、
志をやく、と御上りすて、ますが、駒をうちふ、兵主は、神代を
もとへとちむじをんあ、渡のきり、渚を、の、人集め、人合は西
路名を、むづく、ひだ、だら、まく、海、大化年號より、の、
夏三月四日の夜の事か、すり、うなぬ、なの、いり、大和を、北翁
の海の旅、と、あまり浪もわづ、雷の音、と、あらつちもひく、あらまじ
こちて、名賓、象渕浦もあり、これを、あらえか，在も、豊岡姫、言
ましむ、世をす、蝶痴の神垣、是すが、大寺も、それなり、あらん
うして、今も、旅うな、田かひげ、木のぬま、田たうち牛、青面の名
をひく、から、田子の謡、ま、八十鶴、光十九森と北家河のありだを
うか、秋、た、東の總波す、ばかり夜、月の、み、字の、船、と、川舟す
水畠を、も、さす、今事あじき、し、兵を、あれ、誰も、か、を認、め、す。

行ひるゝよりあがまはめのむりを以て三ノ木也。
トニキシタニ葉をもてまき世をもすくまをもすくともれ
そは鳥海の嶽のやけ木もくすもすれあねば

貞觀のむく物語

三代實錄十八卷 貞觀三年五月十六日幸西先集出羽國司徒三位鑿
等大物忌神社在鮑海郡山上巖石立人跡稀到夏冬戴重禿
無草木去四月八日山上有火燒土石又有聲如雷自山野當河涇水溢
其色青黑臭氣充滿人不堪聞死魚多浮出擁塞不流有兩大蛇
長十許丈相流出入於海只小蛇隨者不知其數緣流橫者多或深濁
水臭氣猶不生聞于古老未嘗有如此之異但弘仁年中見火其後
不幾有事兵狀決之普患並云彼國名神因所禱未賽人家莫解骨
活其山水田是神發怒燒山致災異若不鎮謝一有兵役是日下

知國率賽宿禰去舊體汚焉云止人食りテハ、五十六代の帝、
清和天皇の御代の事ニギヒ文化五年子育冒をヒ北嶽燒夷
の字ナシムハ前シテアリニシニ其火のをアモニ別當はシテ
紫雲麓某山脚リ、今は少子群れわけ登リ少大蜘蛛あり脚抱小
腹破れかクハ土埋山毛リ、其蜘蛛の甲の耳横行尤良わづは
を乞人の詰れ源頼光公病すす給シキ太ある蜘蛛牛俗說辨
少土蜘蛛モヒテひんじゆ少人た元小住めばをヒ土蜘蛛と称ひシ
今もから深山よするのすみけミ越後云蒲原郡の山川のをもぐる
を追ひ出る山蟹ハ大ちも大なりテ、その間の人々のなり。

あらゆるも

秋田郡大阿仁莊本戸石佐藤慶豊後守末乃吉城跡
松鶴山佐藤氏祖之庵を傳村小巖松山樹溫寺ト
ソ曹洞宗の寺等むすび山椒澤山溫泉也ト在リ、天台宗の寺

五時より遅く、禪宗を承り、此等をもむふやまし山根移せり。近きる、
里中の寺跡小庵を作りて、前樹温寺土六世僧俊榮上人より其庵名、
長壽菴といひ、寺名附せしを多す。文化十年正月十五日
皇都より下し入のち、此寺に余を乞ひ、外山中納言光實
卿より俊榮閑居を給りし其事。又、羽州秋田の樹温寺にて、
寺を附。小也降りてかづら家に住む。こうひそむみり
わくえとす今水のみかながむかすまよ。生實と云ふえど、
此歌のころを以て、長壽菴とす。

出羽秋田土崎の達小林町より、かれかづむと城後國ノツリ、不吉い信濃
國ノツリ、つごりいかつとも、ひみちの在安積の沼の草木古に、人多く居り。
西行法師歌ふかづゆ、然聖までの舎をハスムルをよぶは著

聞集定より、陸奥をす。青音日、かづゆ、山麓小聲けし。林葉寺林
作字す。出羽の仙北郡守本郡の白岩村小草彌氏あり。同郡平田村より
草薙刀氏あり。源將軍義家卿より、せうり山路を分。翁號
給せし白岩の武士と号を以て高草を名す。前をほふ守。平田の武夫
薙刀なり。草木を平キ。山道を作れ。君もげよ入未(ま)い。山
山ひこじゆあす。兩人の士等、手を率の姓を給せり。於草彌しき。
草長がも君のゆきども作せ給ひ。字あれ。多の家ふせありて。主小
父年奉字す。津輕源氏の字。行名も。谷をも。主と谷をも。主
をも。幸す。草生水。石生を寄せて。作れ。惣子た。翁號也。之
鎌倉の扇谷。霧が谷。谷。谷。谷。少。會。は。は。唱。渠。之
島。桃生郡守むかみ處に在れ。仙臺の濱邊小閑寺。之
其村の家門す。も。は。か。も。あ。を。そ。び。國。出。作。せ。給。字。じ。す。

まじ口をひひひ、冒頭日をひひひ、先日をひひめ、左右でひひ、月量
ひやまき、た足人鳥がちくらひ、むかひとをひる事、せ三屋、唐柳
屋、十九四の准字、がひひ世小人窟、秋田の株津、軽い窟、仙臺窟
上古、知人ひひ、新撰字鏡、し寄字作字、ひひ多。

久貞都安重昆、夜保知、金、呂賛、水、ひひ、河竹、夜妻、遊女、
木植、ひひ、木、ひひ、木、ひひ、木、ひひ、木、ひひ、木、ひひ、木、氣、
もひて、こひて、す、ひ、銀、よ、多、ひ、ひ、鼻、毛、ひ、ひ、鼻、毛、
す、ひ、金、山、ひ、外、山、山、傀儡師、山、猫、舞、ひ、ひ、と、傀儡、す、今、ひ、舞、
事、小、牛、山、山、傀儡、舞、ひ、牛、ひ、名、ひ、舞、遊、女、猫、ひ、茶、猫、
うじ、ひ、茶、猫、伊勢、牛、今、ひ、出、女、房、ひ、事、山、屋、張、今、ひ、音、
通、牛、走、牛、ひ、音、う、ね、ひ、な、す、ひ、立、ひ、著、意、ひ、音、圓、鏡

城眉す、ひ、高、ひ、あは、裏部、ひ、て、ま、ひ、歌、ひ、名、ひ、た、少、ひ、
そ、ひ、少、ひ、左井浦、丁女、た、章、魚、ひ、松、前、か、早、火、食、火、首、語、ひ、江、籍、
の、藥、罐、ひ、急、手、津川、の、深、浦、手、水、麻、漬、ひ、見、帆、ひ、す、ひ、古、富、重、
ひ、少、ひ、娘、美、女、ひ、し、火、船、人、火、酒、火、相、争、火、う、ひ、今、北、逃、浦、娼、女、
通、称、ひ、次、番、久、保、田、の、根、餅、菜、葉、も、ひ、し、ひ、蕨、根、子、餅、根、花、餅、售、す、
菜、葉、商、火、キ、女、ま、を、う、ひ、少、ひ、名、ひ、お、女、の、石、卷、巻、屋、火、名、氣、仙、
の、小、曲、越、後、の、新、習、ひ、ま、火、新、發、田、の、敵、信、濃、の、洗、馬、の、針、火、相、出、羽、の、
蝶、泻、ひ、鍋、鍋、火、問、度、ひ、下、火、此、業、れ、火、鍋、火、手、鍋、火、げ、ら、す、火、云、久、れ、火、ま、火、余、
の、ま、火、手、髮、長、ひ、り、ま、火、と、う、ひ、ひ、の、名、ひ、セ、火、も、火、今、火、其、
名、ひ、テ、點、火、タ、顏、火、ま、火、極、火、と、流、火、瀧、火、山、火、青、火、
き、ゆ、火、か、れ、火、舟、火、來、火、リ、火、出、火、ト、火、近、江、の、直、妻、火、ト、火、始、暮、火、

せり、夜鶴す、黒鶴す、早歌、藻家す、重孫、もひ、さくら、やも、
比君、と、高、さ、く、し、唱歌、す、夜歌、を、ひ、か、く、い、高、り、比黒鶴
黒、を、首、て、鶴、を、延、ふ、す、や、ち、ね、き、ゆ、く、帽子、す、の、顔、を、か、く、夜裏
り、人の、神、と、り、夜帽子、轉、よ、て、夜、ち、れ、比君、土堂、工社、兵
え、十字、街頭、よ、こ、ま、く、か、く、と、す、比君、の、名、い、と、驚、か、り、

波打ち坂

三、の、萬部、の、戸、より、福岡、越、浪打坂、す、波打ち坂、よ、終、末、嶺山
す、と、說、す、の、國、人、と、し、小野、玄龍、と、し、人、清嶺賦、書、作、て、浪打坂
の、冬、す、と、ゆ、す、と、人、の、語、文政、二、年、己、用、夏、四、月、斗、一、戸、の、金、手、殘、郎
小、手、馬、肉、の、福、藤、藤吉、興、正、あ、す、み、人、を、傳、て、小、滝、山、水、滝、村、め、り、
山、小、入、木、を、伐、り、石、を、割、土、崩、て、テ、ら、人、の、力、を、使、て、水、田、畠、を、望、せ、う、
時、走、堀、れ、ば、と、り、海、百、虎、い、り、多、し、浪、す、峰、の、寺、を、福、岡、重、碑、す、

身、の、負、事、埋、せ、あ、く、の、木、の、松、山、え、ぬ、あ、ぬ、く、身、か、る、
高、き、を、見、て、海、す、あ、り、し、く、あ、れ、て、福、本、興、正、被、れ、

時、走、波、山

あれ、ま、童、る、と、き、人、よ、そ、を、れ、て、富、吉、詣、す、と、い、駆、三、穂、浦、下、
三、葉、の、松、を、と、家、と、木、株、す、ま、み、を、と、父、能、佐、没、り、き、清、水、浦、東、
自、子、氏、の、家、詣、れ、な、木、水、ゆ、こ、あ、木、え、二、三、日、空、て、木、存、お、れ、じ、
二、五、日、す、と、三、千、風、景、書、一、卷、を、と、う、が、ひ、き、え、れ、時、走、波、山、だ、
不、の、歌、と、表、う、向、お、り、年、經、て、そ、の、三、千、風、景、行、脚、文、集、を、と、七、卷、鳴、
社、ひ、ぐ、に、倩、古、跡、く、を、得、果、よ、三、嶋、大、明、神、土、御、橋、の、舞、と、鳴、呼、松、杉、柏、木、及、
け、し、大、社、め、り、近、き、そ、ろ、火、灾、上、而、享、け、し、神、代、唐、少、火、神、転、突、
智、血、大、山、祖、命、を、た、火、災、あ、す、こ、ひ、く、は、悲、十、佐、理、御、額、皋、
迦、鎮、守、が、か、く、い、や、も、も、取、し、神、永、じ、や、で、長、圓、寺、と、當、ま、

の記と前冊北記と同月廿日吹上の松蔭煙跡を、清見寺より北、
三國の風景其後のかず重い波あはれゝ猶ほよや、田子ノ浦、
不空不相の伊富士田子北をまゝ時、天の川のさざな水をうら
ぬ、非權非實の嵐三保、清水の港、身ぐる角の航影あり、畠
於明や葉根をくわぬ事少、時、アマサカ、田子の浦、か
こぬゝの沖は、アマサカ、天の羽衣むかきて、詠之、
羽衣の松原、折川をさ、清水村、白子氏少宿にて、當景軸を、
濱をかき久能東照宮、佛坂舞、ええどり、羽衣を時めり、
富志をあつて、見やつて、と、かわらきあらじ北原も川をよし、
名づめくをささき、さくら多き入江の千方、ひのすをすすひを、

そつりじ

モハ、南部異國間おもろいごく、おもろい、せせらぎの寺、旅僧、往く、ゆきひの師て、

あそひを、子集りて、ありあひしれ、やは、一空、ちくを、金を、
らし集まし、金を、酒じみて、筆、事、とせず、と、高處、あさぎ、此
空、うん、して、ゆき、旅、ぐら、北、外、の、筆、金を、酒じみ、
金を、酒じみ、む、めり、ひ、う、乃、枯野、甚、五、卷、梓、小、も、ちん、
阿、佛、尼、の、う、極、よ、いた、ほ、ま、の、手、ふ、き、不、給、ふ、又、く、ちん、
手、手、無、給、す、ト、け、ふ、り、ち、と、と、む、も、ひ、ば、又、く、ちん、と、も、
を、せ、ば、ひ、と、今、の、世、よ、此、口、論、を、り、ト、ふ、ゑ、よ、く、ち、る、今、り、そ、そ、
身、を、詔、を、い、ま、う、國、の、り、け、あ、り、の、法、源、あ、つ、ます、

津軽平内の人、元三百、年、と、き、少、年、と、慶、や、と、志、幸、草、芳、山、
已、け、入、り、ち、ひ、れ、草、葦、を、秋、剪、ぎ、重、小、舟、を、月、下、臺、を、
家、頭、舟、ひ、あ、る、め、一、に、因、を、寄、書、か、ゆ、六、卷、小、岩、ア、う、

堀川院百首小神 兼昌、西山手向に木は本小岩、木も
神より北下句、神代巻小神籬船石境の物を乞ひて、
うそと船なり、座を乞ふ方意をもじえり、五段からか
候やうへばうといふがそり仰ねばこふのせう。

○みくらるふ
陸奥の鹿角郡小三倉嶽の、出羽秋田郡琴湖の崖、三倉嶺
あり、三倉を倉名とし、出羽古事記家、三倉は御倉也。書かれる、
相似きる名と古事記傳等の御倉板舉等の神に御祖の賜し事と寶
くして、天照大神の御倉小藏名、その棚の上に安置奉て、崇祭多め故、
御名を下す。さて、三倉岬と御倉板舉が御子方に坐えど、
すしらひ事し存れど、相似きる古事記と、

○會元の橋

○秋田郡玉城目、渡邊莊左衛門より上祖は加賀國生、渡部義慶守某
一城なり。其後、そのころをひび世中までしかりて、あたまをきり、餘田
霧勝寺の開山定光坊と同船して、秋田より甲鹿浦本の浦小音、渡良
後姓を二箇と云ひ、今は、渡良よりあり、美濃守がための下の相本
の橋を掛け、今を以て、

○みほほの里

○同郡北比内、大館近在雪澤村の支郷、黒澤村、鎮守は雷神にて、村の人
煙草を禁飲み、ことをいふ事なるほどし、その深浦の近浦
廣戸とよまつて、一村並んで、名をこの飲む事無く、事無く、
まく入る者を少く、ゆゑに、これが多きの事無く、後、度々免

○伊久里

○万葉集、妹の家といひの杜乃藤の名を今も常かづとし、

筆ノ万葉四

廿一

景物藤時鳥^{タキツバカ}の社^{ミヤ}見入り、生栗、井栗をもてたの
地名今ハ^タ本^{ヒメ}呼^メ。蒲原郡三條郷近く其村あり。^ス是れを名に
本^{ヒメ}ト^{シテ}いふ不^ル名^{ナシ}多^ニ人^ノ、^トれ土^ト木^トト^リ、尾張國^ヒ大田社^{タチヤ}
の底前^{シタヘ}敷石^{ハシレ}三^ミ丈^リの圓石^{ハクモクイシ}をねぞれ、^トは是^ト本^{ヒメ}方葉殿^{ヒロヨ}
朝経^{アマス}石^{イシ}見^{シテ}海乃言^{カイハシル}佐^シ故久辛乃^{ハシル}有伊人里^{アマミコロ}曾^{アマツシテ}きある伊寧石^{アマニシ}
丸の事^{アマシ}方葉集^{アマヒラシ}小^{アマシ}海の底^{アマシ}澳津伊寧^{アマニシ}中^{アマシ}ゆ^{アマシ}そ^{アマシ}沖^{アマシ}石^{アマシ}。

一ツヤキ

山本郡^{アマニシ}能代^{アマニシ}圓月山^{アマニシ}阿吽寺^{アマニシ}の鼻社^{ミヤ}と肥前國^ヒの落人^{アマニシ}て、^ト禪長院^{アマニシ}
守其^{アマニシ}人^ノ、其子周防守某^{アマニシ}出家^{アマニシ}て、^ト味鶴^{アマニシ}と^{シテ}太白身^{アマニシ}と^{シテ}のまよ、
弘治^{アマニシ}三^ミ年^リ肥前國^ヒも^シ齋藤^{アマニシ}謹澤^{アマニシ}佐藤^{アマニシ}梅里^{アマニシ}と^{シテ}武士^{アマニシ}大人^{アマニシ}と^{シテ}
来けり^{シテ}。其家の能代^{アマニシ}残れり、^ト其代^{アマニシ}三光院^{アマニシ}が世まで^{アマニシ}存^{アマニシ}り、後^{アマニシ}
修驗者^{アマニシ}となりて、三明院^{アマニシ}と^{シテ}駆者^{アマニシ}と^{シテ}、六^ミ世^{アマニシ}の三明院^{アマニシ}明和^{アマニシ}阿吽寺^{アマニシ}

より以^テ圓月山^{アマニシ}の額^{アマニシ}、阿吽寺^{アマニシ}、三^ミ世^{アマニシ}尊仙法印の書^{アマニシ}阿吽寺^{アマニシ}額^{アマニシ}鬼熊^{アマニシ}
の筆^{アマニシ}、不動場^{アマニシ}の額^{アマニシ}と立^{シテ}鬼助^{アマニシ}の書^{アマニシ}、大峯^{アマニシ}の奥^{アマニシ}鬼山^{アマニシ}、^ト其^{アマニシ}家^{アマニシ}立^{シテ}
鬼^{アマニシ}繼^{アマニシ}鬼^{アマニシ}助^{アマニシ}鬼^{アマニシ}熊^{アマニシ}鬼^{アマニシ}彦^{アマニシ}、其^{アマニシ}五^ミ家^{アマニシ}不動明王^{アマニシ}孔雀明王^{アマニシ}毘盧明王^{アマニシ}、
神變^{アマニシ}大菩薩^{アマニシ}理源大師^{アマニシ}、^ト齋^{アマニシ}と^{シテ}修驗行者^{アマニシ}傳記^{アマニシ}、^ト其^{アマニシ}小^{アマニシ}
赤眼^{アマニシ}黃口^{アマニシ}小^{アマニシ}玉子^{アマニシ}、鬼^{アマニシ}鬼^{アマニシ}鬼^{アマニシ}助^{アマニシ}鬼^{アマニシ}虎^{アマニシ}鬼^{アマニシ}彦^{アマニシ}、^ト大和國^{アマニシ}伊駒^{アマニシ}嶽^{アマニシ}
少^シ始^シ精舍^{アマニシ}を造^ス、鬼取寺^{アマニシ}と^{シテ}其^{アマニシ}寺今^{アマニシ}人^ノ祭^{アマニシ}巡^{アマニシ}嶽^{アマニシ}山^{アマニシ}在^{アマニシ}、
赤眼^{アマニシ}黃口^{アマニシ}前鬼^{アマニシ}鬼^{アマニシ}也^{アマニシ}半^シ日^{アマニシ}そ^シ其^{アマニシ}家^{アマニシ}に^{シテ}稱^{アマニシ}上文^{アマニシ}、^ト其^{アマニシ}文^{アマニシ}
阿忙^{アマニシ}前鬼^{アマニシ}急止^{アマニシ}叫^{アマニシ}禪^{アマニシ}、^ト後鬼律金伏^{アマニシ}金^{アマニシ}又えり、^ト北代氣^{アマニシ}半^シ名^{アマニシ}
いはひ^{アマニシ}、^ト立^{シテ}のめ^{アマニシ}ひのき^{アマニシ}の^{シテ}其^{アマニシ}家^{アマニシ}よみ^{アマニシ}。是^ト數^{アマニシ}落^{アマニシ}と^{シテ}酒^{アマニシ}と^{シテ}酒^{アマニシ}
筆^{アマニシ}、^ト其^{アマニシ}筆^{アマニシ}おも^シかう^{アマニシ}大峯^{アマニシ}護摩^{アマニシ}鬼^{アマニシ}酔^{アマニシ}の如^シ忌^{アマニシ}詞^{アマニシ}誦^{アマニシ}、^ト是^ト其^{アマニシ}家^{アマニシ}
も^シ熊代^{アマニシ}漢^{アマニシ}古^{アマニシ}稻荷^{アマニシ}神^{アマニシ}社^{アマニシ}其^{アマニシ}社今^{アマニシ}大町^{アマニシ}久^{アマニシ}昌^{アマニシ}氏^{アマニシ}の家^{アマニシ}

後を地在寺、阿味寺の祖僧寺の、み百間の地をひき、人
はりほの、を稻荷町といひ、寛保三年癸亥に春田禄を
代地として、その古の稻荷の御社は、在有官舎のうち遷ね、今こそ、
鎮座し、今稻荷町よりむかへし、小路を、筋、近づらる古稻荷
町す、と、名を小路を今いはる町の稻荷社と、久保家主大保氏
光久齋奉、御社別當光明寺より在れ、圓月山阿味寺の寶物、
秋城介賣季書、色紙一枚の、秋の夕暮れ、とある。又、秋
萩の風景の、表、小倉山麓の、那の花落、の、小倉方秋の、
菅、不動尊の画、土佐政信筆、と云ふ。秋家の寄附で、りります。
子卧村の觀世音の寶物、花菱鏡の面、小倉王權現祭、
ひの神をさう、真七斗、め下と古きいからあき、

○やみ神さあざく

秋田郡南比内莊土所郷少庄富神、いは社あり。すこゑ横、花
あき、ももを、しむしむしむしむしむしむしむしむしむしむし
花都、り、旅する琵琶法師の来て、三四日、
もゆきけを、ふわ羊士集りて、そやうと餅、漬、と、まよけんと
お、花都東を、餅、漬、と、まよけんと、飽まずぬ、いもん事、し
まよけんと、すばらうりむら、喰ひ、の、の、花都、は、され、
耳鳴り、も、きく、耳、漬、漬、が、三、年の、餘、一合、も、そ、まよけん
ら、ふ、い、ま、餅、漬、ま、こ、小、漬、ひ、ん、や、や、り、漬、ひ、え、び、
北花都、頭、くふせん、を、あ、ま、キ、給、て、り、今、く、ひ、え、を、お、首、き、や、
さ、く、人、ふ、喰、せ、不、も、と、手、ち、も、ま、花、ま、う、り、け、ま、か、あ、
妻、う、た、ち、て、耳、木、と、い、一、升、の、ま、た、う、ち、と、北、も、ま、う、
多、や、も、櫻、音、け、は、花、都、大、結、人、小、屋、千、い、じ、あ、水、漬、は、
給、水、り、の、餅、を、手、桶、二、小、岩、を、く、り、出、す、ば、花、都、の、ひ、い

付て、酒を飲じて、ふじ心をひく。今一升斗のうち残りたを、すうそ。
 いはや、露骨に通じ、喰ひ残り多くさうばかりやうも、がもうて花都
 ク首きりなま、全く人をも喰て、と戯ふ。おもろし、眞贅人のまの首裏
 あおむか、ふう、花都をもて、花都より高家がくむくがほひよ
 とか、がくをちをこねやす可め、まうまきふたむけり。おもむか
 武士よと、太ふる小舟をまき、とすりて進み出で、小舟、奴等をぬまくも、
 そりけも、やまとどりて、今三かりて、それへ其首の切口事で、餅まわで
 吹出ゆき、ヨウキ、漆も女は此事いふて、めりとせん恐れ、今子
 あねす、花都名のきよと、塚の上櫻一本ノ年、花都塚極を座頭
 極といひ、雨零極を跋北花落ばら、雨水もよもよひをひそむ、あ
 さく、花都をわく人ゆくも群れぞりし花都、老木の形て枯れし
 久の塚の碑りを、がまくまくの通ひ、家の主菅生某、花都亡靈アモ、翁臣

かまきえをみごと、身えをけむ、ひき、神てを程、小社を建て、神
 花都を齋ねば、みまし病あせをもしまし、の冬は、よ、社も雪も
 あり埋れ、上、下、犬の来るやまれかけ、を、家の太郎、うけのもの、を、奉
 さ社を穢すが、神と神、神と神、神と神、神と神、神と神、
 おもむだりの事あらじ、とおけし近隣の河井某に、花都が靈つき
 くせけれど、河井家之社を建て、あひて、多様に、菅生氏のゆき、若跡
 すく座當神社と、河井庭小今をねあひより、

尾けじの社

土所よと近地葛原より、村あひて、小齋、老犬大明神、と神をり、かな
 きむかの事あらじ、ある人の家を、養ふる老犬ありて、家のぬ跡あらま
 り、雪踏は、只、令、やわらかく、けじ、冬を、つけぬ、まく、花都、宿りぬ、
 明あ、夏の雪踏を、昨、大せ奉を、若男、是を、ぞ、誰、復物を、く、おけ

鉏鋤不抜(ハサヒ)うち病ひのみ失のひりて来るぬものにきて家のもと、
立雪踏(タマシタマ)すそをあせあがま復(ハシマリ)をめづけえみ取(ヒヤウ)をゆのうふ策
おこなれんふゆ北(ヒツキ)の神(ミコト)をなれ、神(ミコト)をすけ、老太明神(ヨウタエイジン)玉子すありし、
今も觀世音(カクセイモン)を安置(シテシテ)まつれ、願ひあらん、鉄の雪踏(タマシタマ)をかめちまくせそ
唯(シテ)大のタマト、詣(マサニ)りてこと三河風小、大頭社(オヘイザ)あり、うちまは賽錢鳥
居(ル)ゆまく、昨(アラシ)のよひにて此老太の神(ミコト)の前(マサニ)、抱瘡(モカヤウ)童母
かわ、社宇はま、鉄の雪踏(タマシタマ)足神(タマシタマ)ありて來(カマキリ)てかづくもの、鉄をまゆ
片足作せ、せ足(シタマ)うて老太明神(ヨウタエイジン)よりまゆもとへ下、此神の事杜(シナガタ)の下落葉(シナガタ)

さひほの神
其葛原(シハラ)より近キ猿間村(ヤマミムラ)に、丹内匠(タケシ)の里(シロ)は、南部(シナガタ)に奉、丹内
少(シホ)を此當(カタマリ)にて、身(カラス)のとがきをうちのやうにれど、石井の家(イシイ)より此
事止(マツタツ)りけれど、神主齋(ミコトマツタツ)、丹内明神(タケシエイジン)、左留麻神(シラマ)と云ひ、

むろで秋

みちねの津輕深浦の磯小蠻蛤(シマヒラハグ)海苔(シマヒラ)ありす、肥後國(ヒガノクニ)もむろで秋(シホ)めよ、
深浦の海(シマヒラ)生るむちてれり、其形(ヒメイ)さくやくを昆布(クンブ)のよし長(ヒロ)七寸半(シナハ)、
一尺小足(ヒサツ)草(シダ)の下(シタ)を白(シロ)いとも黄(キイ)をもじりて、端(ハシ)に子榮(コエサワ)起(スル)て、
北海岬(ヒガシカイ)をつみて、伊基(イキ)て、凝葉(ハマヒメイ)心(ハラ)太小制(オソコウ)をて、酥酢漬(スツツバフ)せり、肥後
國(ヒガノクニ)のむろで秋(シホ)し百花菜(ヒバナミツ)の品(モノ)もす、綠海苔(シマヒラ)蔓紫菜(シラヒタシナミ)鰯紫菜(シラヒタシナミ)をば、
ゑびひそ、綠紫菜(シラヒタシナミ)か奈(カナ)山南部、長後(ヒロタシ)の浦(シマヒラ)も産(スル)す、盐羽の恩荷(シナガタ)の海
の、帶海苔(シマヒラ)蔓紫菜類(シラヒタシナミ)に御幣嶋(ヒラヒシマ)も産(スル)す、海苔(シマヒラ)がくいひに
えま水供(シマヒラ)、帶紫菜(シラヒタシナミ)、幅廣帶(ヒラヒタシ)のこじらかねに、そと岩鳴(イハナガ)を、帶嶋(ヒラヒシマ)
にとある半(ハモリ)思荷能春風(シナガタノスカツフウ)、雄鹿鈴風(ヒラヒタノスカツフウ)、雄鹿秋風(ヒラヒタノツカツフウ)、小鹿寒風
寒風(カツカツフウ)、寒風(カツカツフウ)の各ノキ、狂鹿島風(ヒラヒタノウツカツフウ)、五卷の串(シダレ)、帶海苔(シマヒラ)の事(モノ)づを、ふのせど、
妻志半(ハモリ)、狂鹿島風(ヒラヒタノウツカツフウ)、五卷の串(シダレ)、帶海苔(シマヒラ)の事(モノ)づを、ふのせど、

都玖母擣

筆の万角(シマガタ)四

廿三

かずのふす栗原郡三迫莊はせに橋りと慶ひむじ額ひも鐵把
子棒の類を編て橋せよともうくやすとの名をすくと蒲も草多
流す冬の江蒲草橋せしめくづまをひま、越前國半弓石谷今
木にて作き、橋のそれほほの名のをじ其の豆の九十九間めれ、
九十九橋りとくじ名は栗原の橋をすと草薙鎧よ頼朝卿三もの
勢と味方よくじば、栗原つけすあれハ君の詔よかぢより
其をえそそり此づく山の水に下さやの流く

かねの元

栗原郡下枝村の村の名めりまき、家くそく名めり
古今著聞集十九巻、草木の名めり、貞信公なつめをあひてあり、
式部卿親王の家よきくつめの木のけで、其木を下枝させりて
えぞくすくちやくの村名美言ニ

